第二部
「6 年制薬学教育を通して、満足したこと、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」

セッションⅠ

「６年間の薬学教育の中で身についたこと」






第二部
6年制薬学教育を通して、
満足したこと
もっと伸ばしたかったこと
やり残したこと



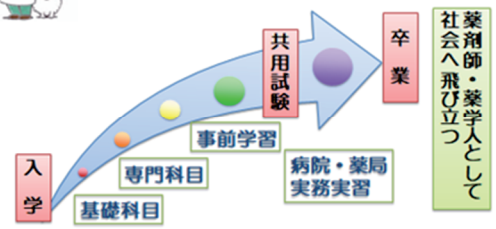
セッションⅠ
「6年制薬学教育の中で
身についたこと」



World Caféでは「私たちの歩み：過去、現在、そして未来を十分語り合えましたか？」



6年間の薬学教育を
振り返ってみましょう

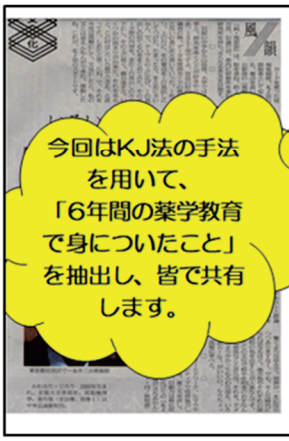


第二部　セッションⅠ
「6年制薬学教育の中で
身についたこと」

KJ法

6年間の教育で修得できたことを
抽出・共有・整理する

- 大学の学びの中で修得できたこと
- どんな学習で身についたかも思い出して



今回はKJ法の手法
を用いて、
「6年間の薬学教育
で身についたこと」
を抽出し、皆で共有
します。

修得した能力

ＫＪ法

情報を徹底して収集

↓

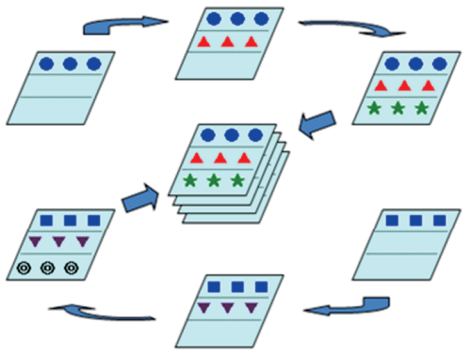
語るところを聞く

↓

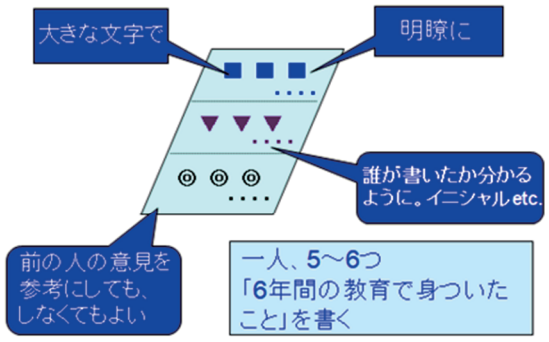
情報の整理

能力・資質の
共有と整理

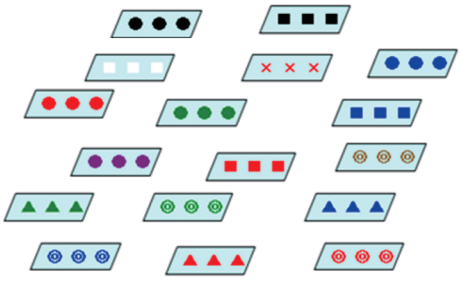
「修得できたこと」を抽出



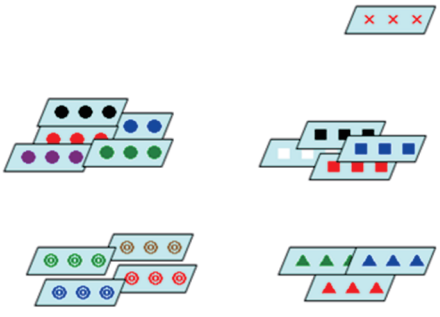
記載上の注意点



語るところを聞く



情報の整理



情報の整理

島を作る

孤独なカード

情報の整理

名札を付ける

島を具体的にイメージできるようなオリジナルな名札を期待します。

名札　名札　孤独なカード　島　名札　名札

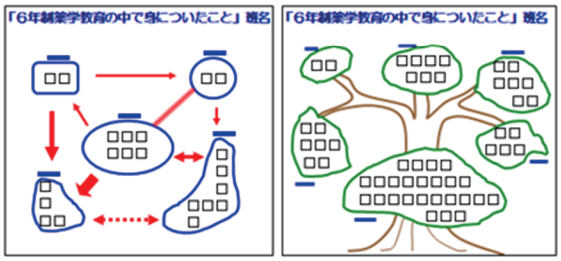
情報の整理

関連付ける

孤独なカード

名札　名札　名札　名札

図式化



自由な発想で描いてみてください

これからの作業

6年制薬学教育の中で身についたこと

KJ法で抽出・整理して発表

S会場では、

- 4役（司会、記録、発表、報告書担当）を決めましょう！
- 自己紹介とWorld Caféで印象に残ったことを紹介しましょう。１０分
- 次に・・・ＫＪ法　６０分



SGDが終わったら・・発表

- Ｐ会場　模造紙で！
- 発表　５分×３班
- 発表順　Ａ ⇒ Ｂ ⇒ Ｃ
- 合同討議　１５分

Ｐ会場

１４：２５集合

資料をもらったら
Ｓ会場へ移動してください！

ＩＡ班

【議論の経緯】

第二部セッションＩでは、「６年間の薬学教育の中で身に付いたこと」をテーマに、KJ法を用いて、討議を行った。

初めに、各自、配布されたシートに意見を書き込んだ。書き込めたシートを右回りに、シートがほとんど埋まるまで回し続け、より多くの意見を出しあった。その後、各シートをグループ全員で話し合いながら、大まかに分類し、結果として、７つの島と３つの孤独なカードが出来上がった。

これらの７つの島に、それぞれ「薬学的知識」「コミュニケーション能力」「他者との関わり」「向上心」「自己管理」「社会人として求められる能力」「あるある」というタイトルを付けた。各島の関連性を位置づける過程で、「幸せについて考えるようになった」という孤独なカードが、６年間の薬学教育の中で身に付いたこと」の集大成であり、全ての島の核であるという考えに至った。この核を中心にし、外と内の２つのグループに大別した。

【プロダクト】

以下に、各島のタイトルと個々のシート内容、及び、その説明を示す。

◆核◆

「幸せについて考えるようになった」

「幸せ」は二つに分類される。一つは、「自己の幸せ」、もう一つは、「他者の幸せ」である。「自己の幸せ」には、夢や希望、働き方、収入、やりがい等が含まれ、一般的な「幸せ」の形である。一方、「他者の幸せ」は、相手が存在することで成立する「幸せ」の形である。ここでいう「相手」とは患者さんであり、「患者さんの幸せ」は、薬学教育を通して身につけた技能を患者さんに還元する過程で、必ず考えなければいけない最も重要な項目である。終末期患者さんの例を挙げ説明すると、少しでも長く生きる（延命する）ことが幸せなのか、苦しみや痛みを和らげ死を迎えることが幸せなのか、これらを踏まえて治療のあり方を考えなければならない。この様に、自己の「幸せ」のみを考えるのではなく、相手を理解し、相手の最善・最良、「幸せ」とは何かを考えられるようになったことは、「６年間の薬学教育の中で身に付いたこと」の中で、最も大きな成果物であるという結論に達した。

◆外グループ◆

ここには、「薬学的知識」「コミュニケーション能力」「他者との関わり」の３つの島を分類した。これらは、授業や実務実習で受動的に学べる、かつ、客観的評価のできる内容であり、カリキュラムに従っていれば、身につけられる（身に付けてほしい）技能であるという見解に至った。

「薬学的知識」

・薬の作用	・薬の作用機序
・副作用	・薬物動態
・疾患についての知識	・構造式がスラスラ書ける
・体調を崩したときに自分で対処！	・薬以外の衛生などの知識

「孤独なカード」

・調剤技術

「コミュニケーション能力」

・コミュニケーション能力
・特殊な状況下におかれた方とのコミュニケーション
・患者さんに合わせたコミュニケーションの方法

「他者との関わり」

・人と協力することの大切さ、一人ではできることが限られていることが分かった	
・患者さん目線で考えられるようになった	・第三者の目線を考えるようになった
・患者さんへの配慮の気持ち	・患者さんへの思いやり
・人に優しくできるようになった	・倫理観
・医療人としての心構え	・薬剤師としての心構え

◆内グループ◆

ここには、「向上心」「自己管理」「社会人として求められる能力」の 3 つの島を分類した。これらは、外グループの技能を身に付ける過程において、個人が自ら深思し、工夫していくことで能動的に身に付けたことであり、個人間で習得の差が大きい素養であるという考えに達した。

「向上心」

・継続した努力	・継続力
・忍耐	・卒業後への勉強意欲
・自分で追究する能力	・自主性
・向上心	・協調性
・知ることに興味が出た	

「孤独なカード」

・人の多様性を知れた

「自己管理」

・PDCA サイクル
・効率の良い勉強法
・がんばることとがんばり方を考えることの違い
・自分でタイムスケジュールをしっかり考えるようになった

「社会人として求められる能力」

・問題解決型思考（研究）	・英語が読めるようになった
・パワーポイントのプレゼンテーション	・発表に慣れた

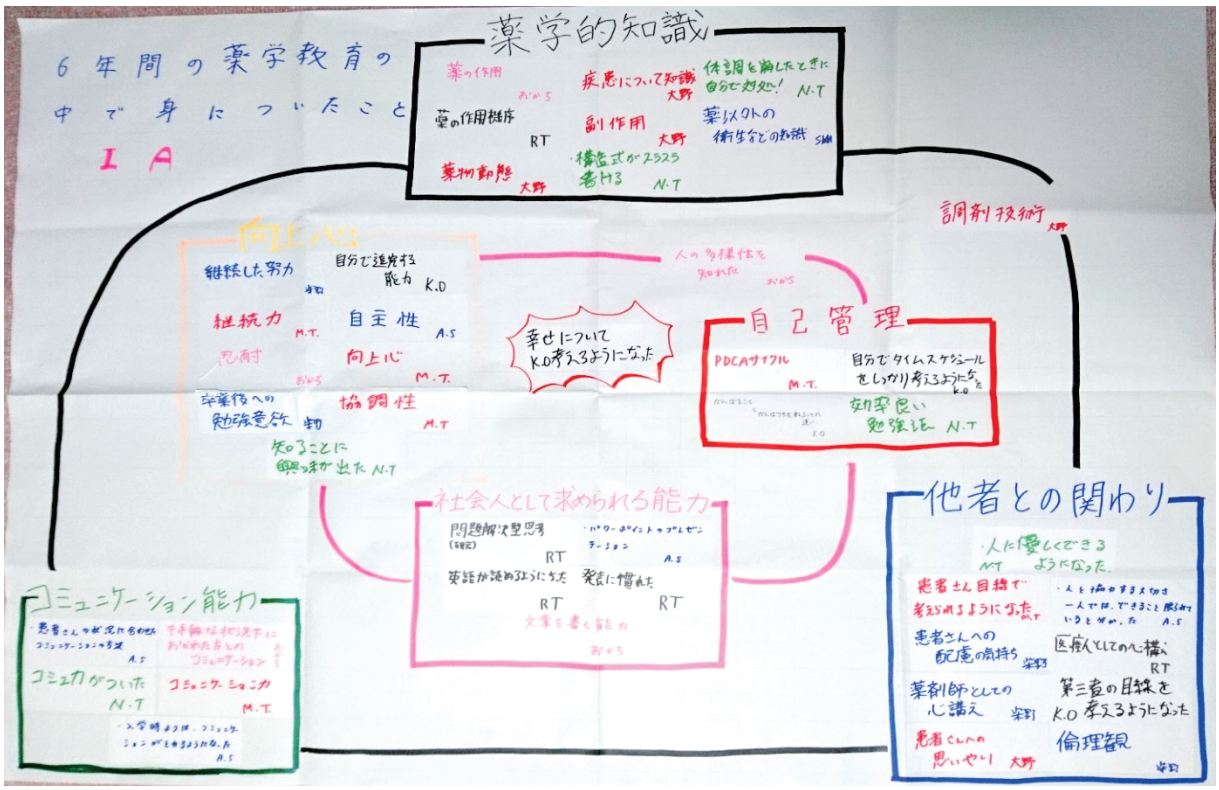
◆番外編◆

身についたこととは、少し異なるかもしれないが、6 年間、薬学教育を受けたことにより、意識するようになったことが挙げられた。

「あるある」

・食品の裏のやつを見るようになった	・移動中、薬局を探すようになった

画像：「6 年間の薬学教育の中で身に付いたこと」プロダクト



【結論】

「６年間の薬学教育の中で身に付いたこと」について討議することで、大学講義や実務実習を中心に、個々が努力を積み重ねたことによる「自己の成長」と「薬剤師として求められる資質との齟齬」について改めて認識することができた。今回の討論を通し、自己と他者、「互いの幸せ」を考え、行動する薬剤師としてあるべき姿を、皆が再考させられる良いディベートとなった。

【謝辞】

最後に、タスクフォースとして細かなアドバイスを頂いた高橋寛先生、井上裕文先生をはじめ、ご協力を頂いた日本薬学会関係者の皆様、多くの先生方に心より感謝いたします。

ＩＢ班

第二部では、第一部での内容を踏まえ、「６年制薬学教育を通して、満足したこと、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」に基づき、セッションＩとして「６年間の薬学教育の中で身についたこと」というテーマでKJ法を用いて議論を行った。

【議論の経緯】

テーマに沿って各々の意見をカードに記載し、情報を徹底して収集した。その後、抽象的な内容のカードや同じ言葉で表現してあるカードに関しては具体的にどのようなことを述べているのか、記載者による説明を踏まえ、カードの語るところを聴き、情報の共有、整理を行った。１枚ずつ丁寧に検討していき、大きな８つの島と孤独な２枚のカードとして分類し、名札を付けた。島同士の関連性を考慮し、流れのある配置を考えた。模造紙に移した後に島同士を矢印にて結んだ。残り時間が少なくなり、急いで模造紙にまとめることとなったが、情報の共有、整理の段階で時間をかけたこともありスムーズに終えることができた。

以下に、分類した各島の名札（１.～８.）とそれに属した各カードの意見の内容、また孤独なカード（９.）を示す。また、実際のプロダクト、それをもとに作成した関連図はこのセッション報告書の最後に示す。

１. 専門知識・技術

・薬の知識
・調剤技能
・薬剤師業界の知識
・実験器具の使い方
・薬剤師の歴史
・物の取り扱い方（薬、機械など）
・基礎知識
・医療費の大きさ（医療費とかの知識）
・どんな薬があるか
・専門的な言葉

２. 向上心・スキルアップ

・忍耐力
・自分の限界
・1つのことにうちこむ
・苦手なことにも挑戦！
・勉強から逃げない気持ち
・大学の外に積極的に出ること
・暗記力

３. 医療人としての心くばり

・伝えようとする気持ち
・思いやりの心
・周りを見る力
・人とのつながりの大切さ
・人を尊重する気持ち

４. 環境への適応力

・話の流れを把握すること
・目上の方と話す
・コミュニティーでの過ごし方
・世渡り
・空気を読む力
・人（大人）との接し方
・コミュニケーション能力
・伝える能力
・相手と話す際の言葉遣いなど

５．自己分析

・PDCA サイクル
・問題解決能力
・ゴールの設定とそこまでの道筋の立て方
・自己反省
・反省から、ここからどうするか考えるようになった

６．研究・探究

・研究能力
・予測する力
・研究論文
・知識や情報収集能力
・様々な方向から見る
・研究
・文書の書き方
・想像力

７．場面ごとでの伝える力

・発表なれ
・指導する能力
・人前で話すこと
・プレゼンの方法
・簡単に話す能力
・わかりやすく人に伝える力

８．薬剤師の将来像

・どんな薬剤師になりたいか
・将来を考えること

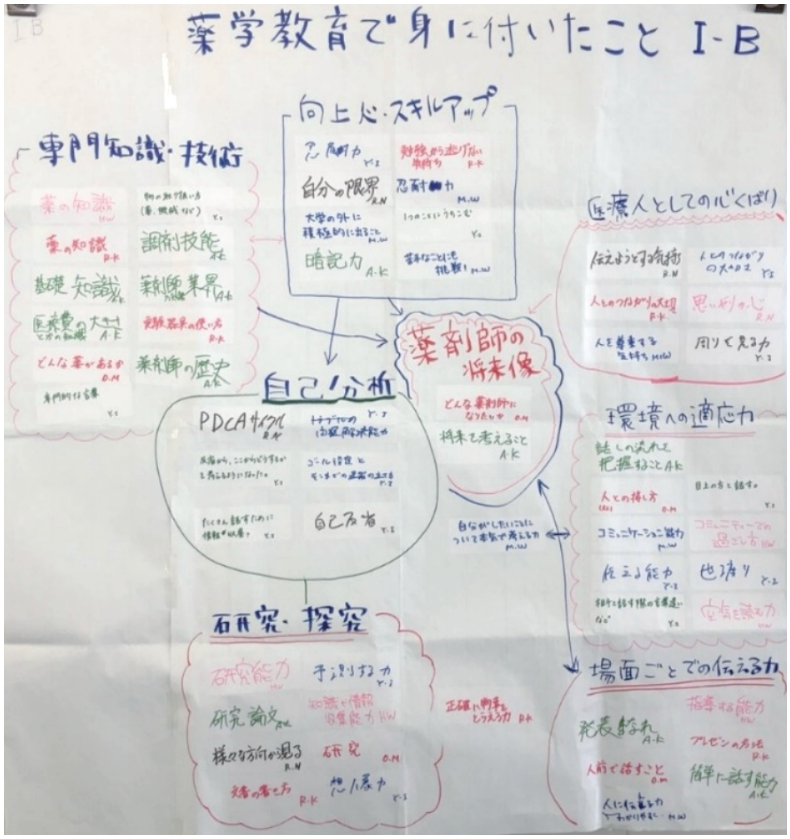
９．孤独なカード

・自分がしたいことについて本気で考える力
・正確に物事をとらえる力

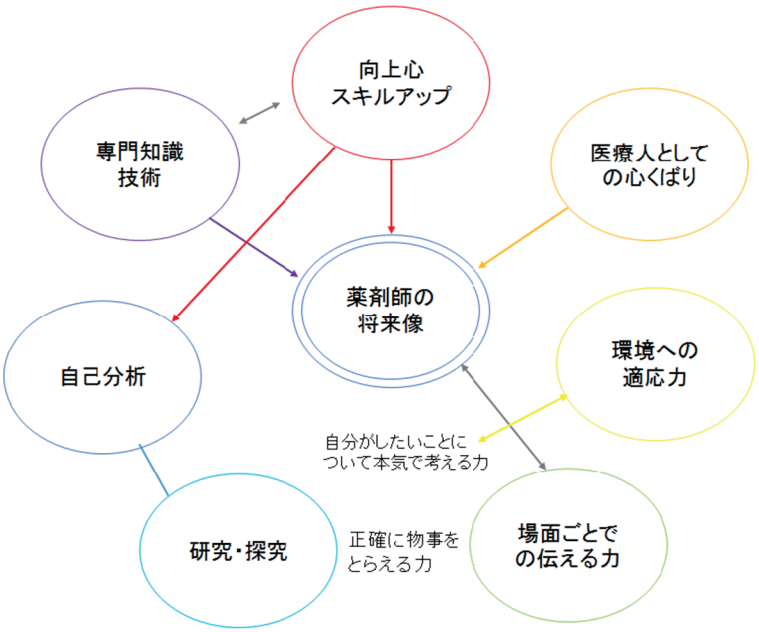
【議論の結果】

ＩＢ班では、「薬剤師としての将来像」がプロダクトの中心となる形でまとまった。在学中における経験や知識、会話から様々なものを修得、影響を受けることにより修正され、自身の成長に繋がる良い流れとなっている。また、挙げられた全てのことが複合したことにより、以前では抽象的に描いていた薬剤師像が現在では明確となり、具体的に「自分はこうした、こうなりたい」と思案し、言語化できるようになった、という結果となった。

【プロダクト】



【関連図】



【謝辞】

今回、議論を行うにあたり、温かく丁寧に指導して頂きました、タスクフォースの先生方をはじめ、参加されたすべての方に心より感謝致します。

ＩＣ班

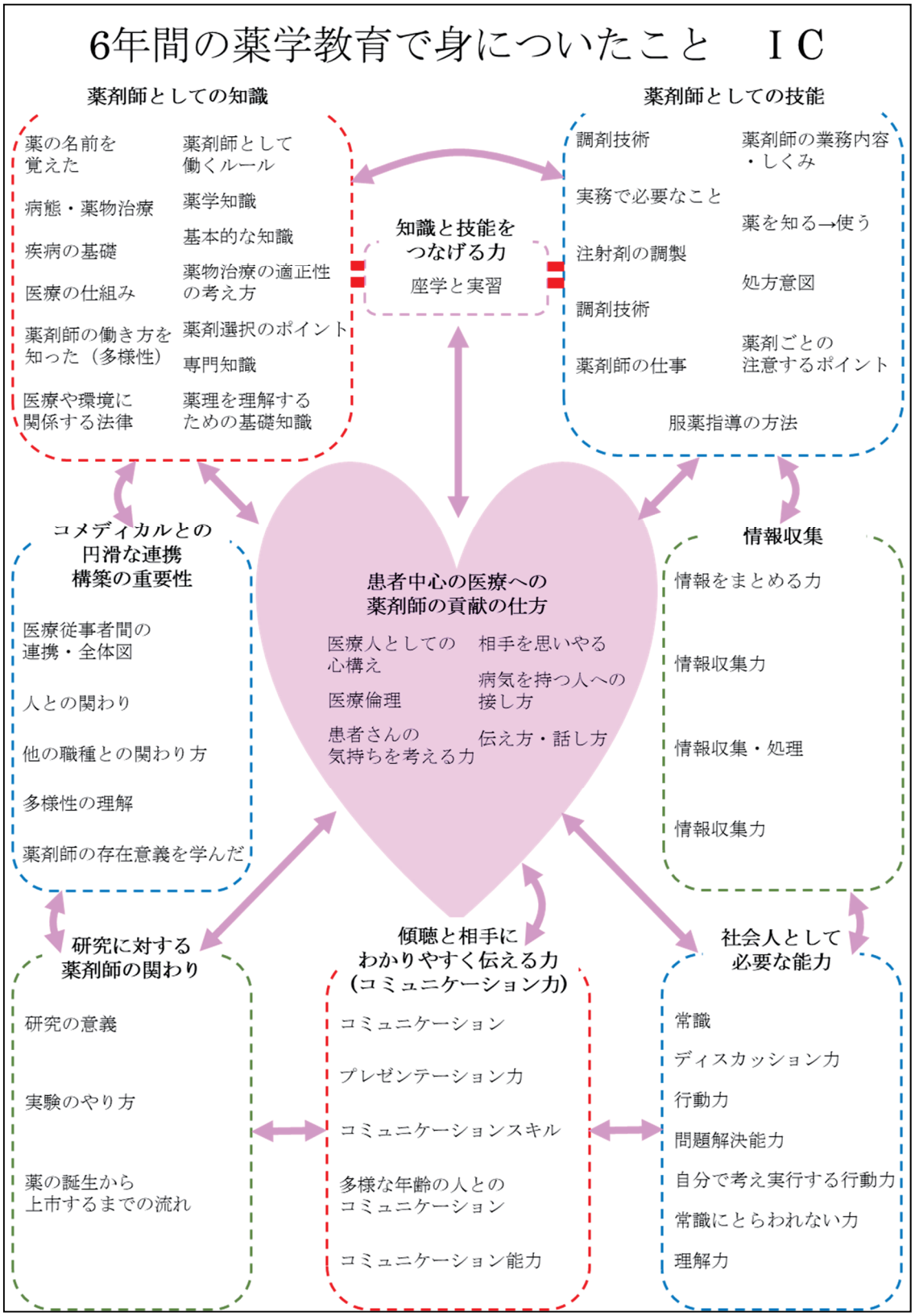
第二部は「６年制薬学教育を通して、満足したこと、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」について取り上げられた。セッションＩではKJ法を用い、「６年間の薬学教育の中で身についたこと」という課題を通して６年間の薬学教育を振り返った。最初の10分程度で、メンバー各々が６年間の薬学教育の中で身についたことをカードに記した。その後、メンバー全員でカードの内容を必要に応じて記入者の補足を加えながら確認し、似た内容のカードをまとめ、島を作った。島の内容に応じてその島に名前を付け、島と島の関連について議論し、図式化した。

【議論の経緯】

「薬剤師として必要な知識」の島は大学で学ぶ内容を示し、「薬剤師としての技能」の島は調剤技術のみならず大学で学んだ知識をもとに臨床現場で必要とされる技能（能力）を示す。「コメディカルとの円滑な連携構築の重要性」の島では医療に関わる職種の全体像を知り、そのなかにおける薬剤師の位置づけを学ぶことができたことをグループ内で確認した。「情報収集」の島は、臨床現場での情報収集の手段や研究における情報収集の手段とその情報の加工の仕方を学んだということを示している。「研究に対する薬剤師の関わり」の島は、実験のやり方や研究を行う意義を身につけることができたというという基礎的部分から薬の誕生から上市するまでの流れという基礎研究から臨床に繋がる流れを学ぶことができたという幅広い意見がだされた。「傾聴と相手にわかりやすく伝える（コミュニケーション力)」の島では患者に対してだけではなく、他の職種とのコミュニケーションをとる能力も身についたという意見が多く挙げられた。「社会人として必要な能力」の島は、社会人として必要な常識を身につけられたという意見がある一方で常識にとらわれない力が身についたという意見もあった。常識なくして常識にとらわれない発想は得られないため、意見の方向性は一致していると考え同一の島に分類され、行動力や問題解決能力など一社会人として必要とされる能力が身についたという意見が挙げられた。

医療倫理などすべての基礎となる部分をベースに知識や技能などを生やす樹木のような関連付けもグループ内で話し合われたが、それぞれの島が複雑に関連しているため、すべての核となる医療倫理などを中心に据えて図式化した。「座学と実習」は大学で学んだ基礎の部分を臨床の内容と関連付けすることができたという意味であり基礎と臨床の橋渡しの意味合いが含まれると判断し、「薬剤師として必要な知識」と「薬剤師としての技能」の中間に配置した。

【プロダクト】


6年間の薬学教育で身についたこと　ＩＣ
薬剤師としての知識
薬の名前を覚えた
薬剤師として働くルール
病態・薬物治療
薬学知識
疾病の基礎
基本的な知識
医療の仕組み
薬物治療の適正性の考え方
薬剤師の働き方を知った（多様性）
薬剤選択のポイント
専門知識
医療や環境に関係する法律
薬理を理解するための基礎知識
薬剤師としての技能
調剤技術
薬剤師の業務内容・しくみ
実務で必要なこと
薬を知る→使う
注射剤の調製
処方意図
調剤技術
薬剤ごとの注意するポイント
薬剤師の仕事
服薬指導の方法
知識と技能をつなげる力
座学と実習
患者中心の医療への薬剤師の貢献の仕方
医療人としての心構え
相手を思いやる
病気を持つ人への接し方
医療倫理
患者さんの気持ちを考える力
伝え方・話し方
コメディカルとの円滑な連携構築の重要性
医療従事者間の連携・全体図
人との関わり
他の職種との関わり方
多様性の理解
薬剤師の存在意義を学んだ
情報収集
情報をまとめる力
情報収集力
情報収集・処理
情報収集力
研究に対する薬剤師の関わり
研究の意義
実験のやり方
薬の誕生から上市するまでの流れ
傾聴と相手にわかりやすく伝える力(コミュニケーション力)
コミュニケーション
プレゼンテーション力
コミュニケーションスキル
多様な年齢の人とのコミュニケーション
コミュニケーション能力
社会人として必要な能力
常識
ディスカッション力
行動力
問題解決能力
自分で考え実行する行動力
常識にとらわれない力
理解力

【プロダクト画像】

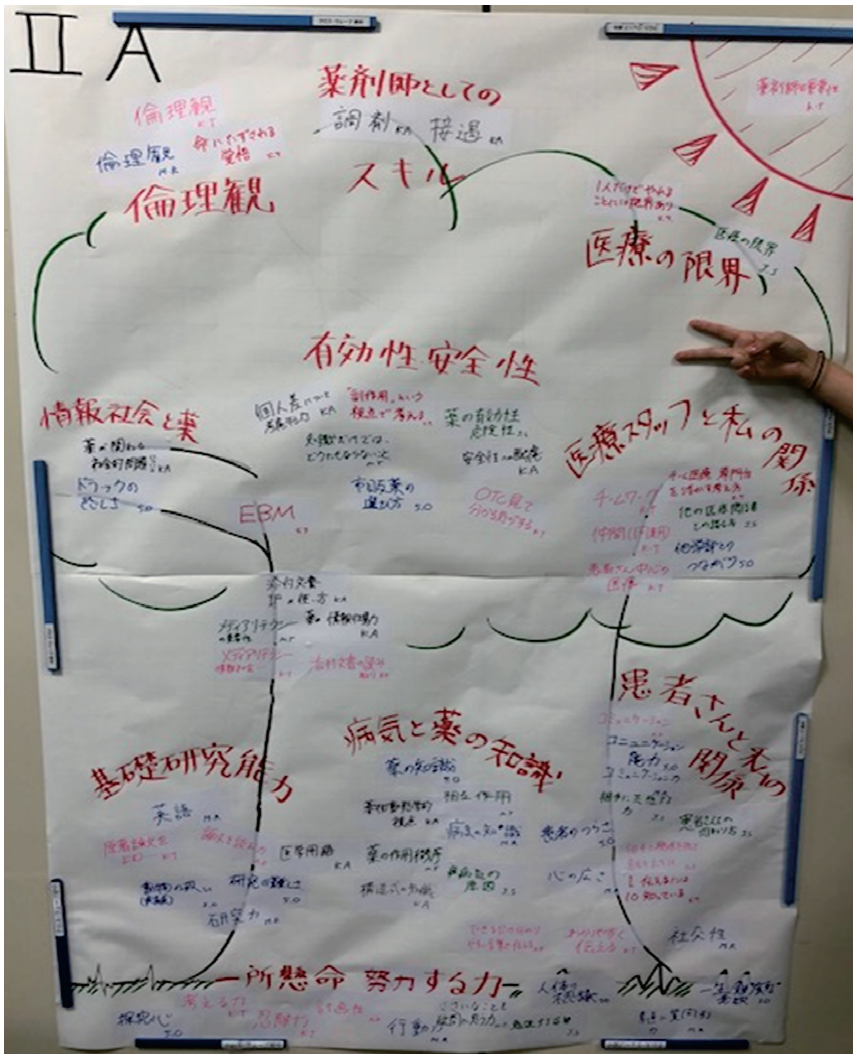

6年間の薬学教育の中で身についたこと
IC
薬剤師としての知識
薬の名前を覚えた
病態・薬物治療
疾病の基礎
医療の仕組み
薬剤師の働き方を知った(9月頃)
医療や環境に関係する法律
薬剤師として働くルール
薬学知識
基本的な知識
薬物治療の適正性の考え方
薬剤選択のポイント
専門知識
薬理を理解するための基礎知識
知識と技能をつなげる力
座学と実習
N.E
薬剤師としての技能
調剤技術
実務実習で必要なこと
注射剤の調製
調剤技術
薬剤師の仕事
N.E
薬剤師の業務内容・しくみ
薬を知る→使う
N.E
処方箋
薬剤毎の注意するポイント
N.T
服薬指導の方法
M.K
コメディカルとの円滑な連携構築の重要性
医療従事者間の連携、全体図
多職種の理解
他の職種との関わり方
人との関わり
N.E
薬剤師の存在意義を考えた
M.M.
患者中心の医療への薬剤師の貢献の仕方
医療人としての心構え
M.K
相手を思いやる
N.E
医療倫理
S.M.
伝え方・話し方
N.E
患者さんの気持ちを考える力
M.M.
病気を持つ人への接し方
N.T
情報収集
情報をまとめる力
Y.Y.
科学的な情報収集力
S.M.
情報収集・処理
A.N
情報収集力
Y.Y.
研究に対する薬剤師の関わり
研究の意義
実験のやり方
薬の誕生から上市するまでの流れ
M.M.
傾聴と相手に分かり易く伝える力(コミュニケーション力)
コミュニケーション
M.N
プレゼンテーション力
S.M.
コミュニケーションスキル
A.N
多様な年齢の人とのコミュニケーション
N.K
コミュニケーション能力
Y.Y.
常識
N.E
ディスカッション力
S.M.
行動力
A.N
問題解決能力
Y.Y.
自分で考え実行する行動力
S.M.
社会人として必要な能力
常識にとらわれない力
Y.Y.
理解力
Ic. A.N

Ⅱ A 班

【議論の経緯】

まず、メンバーの各々が身についたことをカードに書いた。関連のあるカードを集め、島を作り（１～10)、できた島と島の関係を考えていった。島同士の関連を考えていく中で、私たちは、６年制薬学教育を通して、木が年々徐々に大きく育つように、成長してきたことに気づいた。１） 「一所懸命努力する力」は、他の島のことを身につけるための原動力となるマインドで、木の根に当たると考えた。２）～４）は基礎的な知識・技能、３）～８）は応用的な知識・技能であるという意見から、２）～４）を木の幹、５）～８）を葉の部分に配置した。9)「倫理観」は、実感し難いが、重要であるという意見から、空気とした。10)「医療の限界」は、臨床現場で感じた、２つの限界で、頭の片隅に置いておくべきということから、右端に配置した。11)「薬剤師の重要性」は、私たちの成長を後押しするものという意見から太陽とした。

【プロダクト】



１） 一所懸命努力する力

- 探究心
- 考える力
- 計画性
- 忍耐力[*1]
- 行動力
- 勉強する姿勢
- 素直に質問する力
- 人体の不思議
- 一生勉強する意欲
- ささいなことを疑問に思う力

2）基礎研究能力

・英語　・医学英語　・論文を読む力　・原著論文を読む力
・実験動物の扱い方　・研究力　・研究の難しさ

3）病院と薬の知識

・薬の知識　・薬物動態学的視点　・相互作用　・薬の作用機序
・構造式の知識　・病気の知識　・病気の原因

4）患者さんと私の関係

・コミュニケーション能力　・わかりやすく伝える
・できるだけわかりやすい言葉で伝える　・1 伝えるには、10 知っている
・患者さんとの関わり方　・相手に興味をもって、意見を出すこと
・相手に共感する力　・患者のつらさ
・心の広さ　・社交性

5）情報社会と薬

・薬が関わる社会問題について　・ドラッグの恐ろしさ[*2]
・EBM　・メディアリテラシー[*3]
・添付文書、IF の使い方　・添付文書の読み取り
・薬の情報収集能力

6）有効性、安全性

・個人差について、考慮する力　・「副作用」という視点で考える
・薬の有効性、危険性　・安全性への配慮
・知識だけでは、どうにもならないこと[*4]　・市販薬の選び方
・OTC を見てもわかる気がする

7）医療スタッフと私の関係

・チームワーク　・チーム医療、専門性を活かす考え方　・仲間
・患者さん中心の医療　・他の医療関係者との関わり方　・他学部とのつながり

8）薬剤師としてのスキル

・調剤　・接遇

9）倫理観

・倫理観　・医療にたずさわる覚悟

10）医療の限界

・医療の限界[*5]　・1 人だけでやれることには限界あり

11）薬剤師の重要性[*6]

＊1　忍耐力：6 年間必死で勉強した結果得られた。

＊2　ドラッグの恐ろしさ：薬学部に入るまでは、ごく一部のものを指すと思っていた。

しかし、医薬品を学ぶうちに、適切な使用をしないと、依存性を示すものや過度な中枢興奮作用または抑制作用を示す医薬品が多くあることに気づき、医薬品も一歩間違うと危険ドラッグになってしまうと考えるようになった。

＊３　メディアリテラシー：医薬品に関する情報がインターネットに多く掲載されている中で、どの情報が適切な情報かを判断できつつある。これは、薬学の基礎を学んだことで、身についたことだと思う。

＊４　知識だけでは、どうにもならないこと：勉強していくうちに、薬の作用機序や相互作用を起こす機序が不明のものが多々あることに気づいた。医療の中には、科学的には、まだ未解明な現象でも、実臨床におけるデータなどから推察されることを把握しておく必要があることを学んだ。

＊５　医療の限界：臨床現場において、現在の医療では、治療できない時があることを実務実習で感じた。これからは、その状態になる前に、予防を周知していくことが必要だと思う。

＊６　薬剤師の重要性：勉強する中で、薬剤師の重要性を感じるようになった。実務実習では、それを肌で感じることができた。そのことは、私たちのモチベーションになった。また、私たち自身も、多くの人に薬剤師の重要性を感じてもらえるように努力していこうと思う。

【まとめ】

６年間の薬学教育において、薬学的知識や技能のほかに、対人業務に必要な考え方や、能力を身につけることができ、人間的にも成長できたことが示唆された。

Ⅱ B 班

第二部セッションⅠ「６年間の薬学教育の中で身についたこと」について議論した。６年間の教育で修得できたことを抽出・共有・整理する手段として KJ 法を用い、まとめた。

【議論の経緯】

テーマ「６年間の薬学教育の中で身についたこと」

①大学生活の振り返りによる学びの抽出

班員８人各自が 15 分程度、大学での学びを振り返りつつ、薬学教育を通して学び得た能力・資質などをカードに記入した。

②意見の共有と整理

班員全員で、記入されたカードをひとつずつ読み上げ、記入した人が簡単な解説、エピソードを話すことで、短い言葉を具体性を持ってイメージを共有した。その上で、同様の意図を持って書かれたカードをひとつのグループ（島）としてまとめる作業を行った。

③グループ分けと関連付け

「薬学的知識」「問題解決」「計画性」「両立」「進路」「つながり」「患者さんとの接し方」「薬剤師の心構え」「チームとして」「薬剤師の責任」「伝え方」「人間的成長」

以上 12 グループにタイトルをつけて大別し、このうち「両立」のみ孤独なグループ（島）として位置付けた。これらの関連付けとして、前６つは大学での学び、次の５つは実務実習での学び、最後の１つ「人間的成長」は最も重要な集大成、すなわち中心的な核として位置付けた。

以下、プロダクトとしてまとめた。

大学での学びでは、薬の専門家になるための薬学、病気についての知識が当然ながら学びの主体となり、一番大きな島となった。また、研究室での活動では、実験手技の習得のみならず、研究の重要性や大変さを学んだ。研究は、問題解決能力の獲得につながっており、自分で考えること、問題や課題を見つけること、それを自分で調べ、解決に導くこと、同時に仲間との助け合いが重要であることの学びを得る手段でもあったと考えた。日々の勉学や研究、実習など、タイトなスケジュールの薬学部では、やるべきことの優先順位をつけ、計画性を持って行動することも身に付いた。また、孤独な島となった趣味との両立という意見も、有意義な学生生活を送る上で重要な項目のひとつだと考えた。特に就職活動をする上で、薬学生が活躍できる社会のフィールド、すなわち進路の幅広さを知り、可能性が広がった。大学での学びが臨床に直結する重要なものであること、などの「つながり」も、大学で学んだことのひとつとして挙がった。

一方、実務実習で学んだこととして、まず薬剤師としての心構え、そして薬剤師の責任の重さを感じ、理解したという意見があった。初めて薬学生として大学の外に出て、実習生として医療現場を体感し、医療従事者になることの責任感、自分が下す判断の責任の重さ、患者さんと向き合う覚悟を学び得た。やはり人の命に関わる職種である薬剤師となる以上、それだけの覚悟と責任を持つことの重要性を感じた。医療現場では、薬剤師だけでなく、多職種との連携が重要である。チームとして働くことを実感したという意見が多く、チーム医療として多職種と連携するには、まず薬剤師のポジションを理解すること、そして他職種のことを理解し上手に関係を構築していくことがより良い医療の実現につながると考えた。患者さんとの接し方については、相手の立場に立って物事を考えることができるようになった、という意見、同時に伝え方として、伝わるように相手に応じた話し方の

模索が必要だという意見が出た。ここで「コミュニケーション能力」という言葉が多くの班員から出たが、具体的に、医療者とのチーム医療での情報共有、患者さんに対する物事の伝え方というように、様々な趣旨であった。

そして最も重要な集大成として、薬学教育全般を通して学んだことと位置付けた「人間的成長」については､大学内や社会全般を含めた人とのつながりを生むという趣旨のコミュニケーション能力、リーダーシップ、行動力、積極性が万事に通じる重要な要素だと結論付けた。自分を信じ、意見を発信し主体的に動くことで道が開け、人とのつながりを得るコミュニケーションにより将来の展望を見つけられた、ともいえる。これらは薬学教育を通じて学び得たことであるとともに、これからの薬剤師人生においても持ち続け、磨き続けるべき資質である。やりがいという意見は、薬学教育を受けて得ることのできた、薬剤師としての働くことに対してのやりがいであり、大切にし続けたいことだと結論付いた。

【プロダクト】

☆大学での学び

「薬学的知識」

・専門的知識、薬学的知識、病気の知識
・病気について説明できるよう勉強した
・OTC 医薬品の成分が分かるようになった
・薬の危険性と重要性を学んだ
・実験手技の習得
・研究の重要性、大変さ

「問題解決」

・自分で考える力
・自分で考えて調べる力
・問題を解決するための方法
・問題を見つける力
・正しい情報の選択
・課題解決能力
・研究室での教え合い

「計画性」

・やるべきことの優先順位をつけること
・計画性

「両立」

・趣味との両立

「進路」

・進路の多様性
・進路の幅広さを知った

「つながり」

・大学が臨床につながっていることを知った
・薬の開発から患者に届くまでの流れを知った

☆実務実習での学び

「薬剤師の心構え」

・医療人としての心構え
・薬剤師の心構え

「薬剤師の責任」
・患者さんと向き合う覚悟　・自分の判断に対する責任の重さ
・医療現場の責任の重さ　・医療従事者になることの責任感
・人の命に関わる職種だと実感した

「チームとして」
・薬剤師の仕事を知ったこと　・薬剤師の具体的な仕事内容について知った
・薬剤師の役割を理解できた　・チーム医療を実際に体験することができた
・チーム医療における薬剤師のポジション
・医療には様々な人が関わっていることを知った
・他職種との関わりの重要性　・多職種連携の大切さ
・医療職ごとの得手、不得手が分かった　・多くの人と仕事をする大変さ

「患者さんとの接し方」
・コミュニケーション能力　・患者さんとの接し方
・実際に患者さんが困っていることを知ることができた
・相手の立場に立って物事を考える力
・自分のことだけでなく周りのことも考えられるようになった

「伝え方」
・コミュニケーション能力　・相手に伝わるような話し方
・自分の意見を言う力　・パワーポイント等を使用した発表方法

☆☆薬学教育を通した学びの集大成
「人間的成長」
・リーダーシップ　・自分を信じる力
・コミュニケーション力（周りの人と）　・行動力
・集中力　・積極性
・主体的に動く



セッションⅠの各グループの発表と合同討議を経て、グループⅡの他２班とも学び得たことに「倫理観」という項目があった。この言葉は、自班では出なかった言葉であるが、班員全員が根底に持っており、医療人としての心構えや医療現場での責任感という言葉で置き換えられていたと考えた。また、ⅡCグループで出た、「医療の限界を知った」という意見は斬新で驚いたが、共感できるものであった。特に実務実習を通じて、医療の限界、薬剤師の職能から患者さんにできることの限界、制度に左右される現状、様々な限界という障壁を目の当たりにした。しかし、私たちの学びの集大成、すなわち核と位置付けた、主体性、行動力、自分を信じる力、人とのつながりを構築するコミュニケーション能力等により、自分の中に限界を作らず奮闘できる薬剤師になれると考えた。

Ⅱ C 班

私たちの班では、自分に向けての基礎的な部分：根性論と、他人へ向けての基礎的な部分：心構え、を土台の幹とした。根性論は、体調管理、勉強習慣といった、実務実習を行うにあたり、非常に基本中の基本となる事柄であるため、個人で最低限必要な努力という意味合いも込めて、「根性論」という島の名前をつけた。
その後の枝分かれする太い枝としては、「実務経験」を通して学んだ項目を、以下の５つとして挙げた。

① 薬学基礎知識：
学校における座学で身につけた知識の重要性と、実習により意識した生涯学習の姿勢が挙がった。詳細としては、「薬物治療」、「薬理動態」、というように具体的な科目の名前を挙げる人がいる一方で、「薬がどのように使われているか」、「薬の副作用とその対処法」というように、実務実習を経て、学校で身に付けた知識だけでは不足していることを実感し、今後も更なる知識の獲得が必要であることを意識した姿勢の意見が挙がった。

② 職域の広さ：
それぞれの進路、実務実習先、実習以外で自主的に参加した校外学習で知り得た薬剤師の働きの幅広さを実感したことによる意見が見られた。
また、講義、経験から、各々の地域において地域性も異なれば、抱える問題も異なり、求められる医療も異なることも挙がった。
具体的には、大学によっては、オールドニュータウンと呼ばれるかつて新興住宅地だった場所で、現在は都市部にありながら高齢化や独居が問題となっている地域での医療について学習する講義を受けたことで、地域医療に興味を持ち、自主的に過疎地域（沖縄北部地域）における実習に参加して、地域全土で薬剤師が不足している地域における医療を経験した行動力のある学生の話が挙がった。
コミュニケーション：
対患者さん、対医療従事者（同僚の薬剤師を含む）の大きく２つに分けた。前者では、患者さんに伝えると言う広い意味でのプレゼン力だけではなく、傾聴の姿勢の大切さが挙がった。
後者では、医療チームの一員として働くため、他職種との連携のためのコミュニケーション、また薬剤師の職域の広さにも通じるが、様々な薬剤師の活躍の場があるため、薬剤師間の情報交換を意識した意見が挙がった。

③ 調剤：
薬剤師の基本業務であり、実習においても多くの時間が割かれたため、基本事項として挙がった。また、調剤技術と言っても一概に、ピッキングとは言えず、漢方薬局での「きざみ調剤」というような独特な調剤方法があることを実務実習で学んだことも挙がった。

④ 思考力：
卒業研究を進めるに当たって、患者さんの直面している問題を解決するにあたって、また大きな意味でミスを防ぐために必要、と言う点で３つに大別出来る意見が挙がった。
また、似た意見がなく、島には分類できなかった SGD、データの集め方について：
SGD は、在学中の学校においてその方法を学んだ。今回の WS 及び就職した場所においても、集団の意見をまとめていくという観点から、今後も必要となる要素として挙がった。データの集め方については、卒業研究を進めるに当たって、データの集め方、

実務実習中の添付文書とインタビューフォームの使い分け等の話が挙がった。
他の班の発表を聞いて感じた事
「薬剤師の必要性」を全ての源として、太陽として模造紙に描いていた。自分達の班はビジュアルに関してはあまり話していなかったので、他班では、発表を前提にビジュアル面に関してのディスカッションも盛んにあった事に感銘を受けた。やはり、どの職場においても自分の中で知識を蓄積して終わり、と言う働き方はなく、知識を伝える相手が必ずあると思うので、ディスカッションの内容を深める事も重要であるが、もう少し時間を意識し、相手への伝え方の点におけるディスカッションも行う必要性があると感じた。それぞれの班の模造紙の書き方を見て、このような内容の充実に関するディスカッションだけではなく、相手への伝え方におけるディスカッションの必要性を学べた。
また、議論の内容としては、医療の限界、という意見が自分の班では出てこなかった。治療しても完治しない患者さんを見て、病気を治療することだけではなく、病気を未然に防ぐ事の大切さを学んだ、という意見を聞いて自分の実務実習中に接した患者さんを思い返すきっかけとなると共に､意見としては自分の班では出てこなかったが､医療の限界を知ったからこそ、より良い医療を作っていくために、様々な進路を選択したのではないか、と考えた。

（KJ 法プロダクトの各カードに記載された島別の意見一覧）

患者さんとのコミュニケーション
・患者さんとのコミュニケーション力
・伝え方（分かりやすく、分かる言葉で）
・情報の伝え方
・プレゼンテーション
・患者さんの話をよく聞く事
・患者さんの話を聞くこと

医療従事者とのコミュニケーション（チームワーク）
・チームワーク
・友達の大切さ
・他職種との関係性

コミュニケーション
・コミュニケーション力

職域の広さ
・薬剤師の役割
・色々な形の薬局
・薬剤師の仕事の幅広さ
・地域医療

調剤
・調剤
・調剤技術
・きざみ調剤

思考力
・問題解決能力
・考える力
・研究的思考
・過誤防止のために必要なこと
・協力して問題を解決する力

実務経験

・実務経験

薬学基礎知識

・生薬の知識
・薬の知識
・薬理動態
・主要な病気とその原因との因果関係
・薬学的知識
・薬学の知識
・薬物基礎知識
・漢方
・薬物治療
・薬がどのように使われているか（臨床薬学）
・薬の副作用と対処法
・専門知識の奥深さ
・薬学的な専門知識

SGD

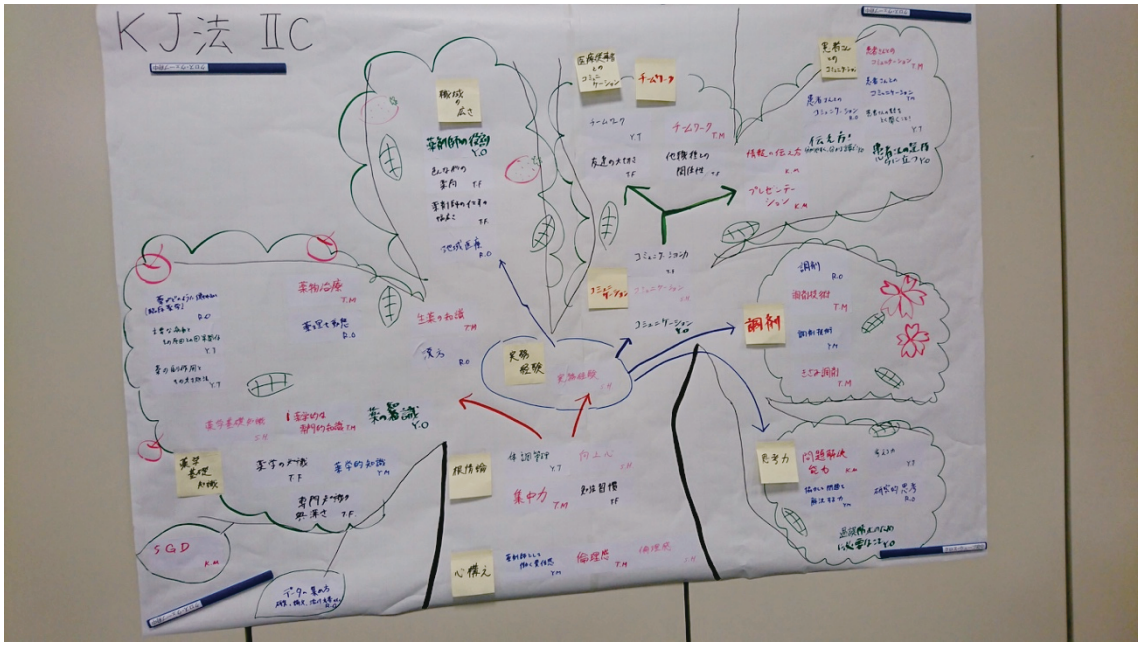
・データの集め方（研究、論文、添付文書など）

根性論

・体調管理
・向上心
・集中力
・集中力
・勉強習慣

心構え

・薬剤師として働く責任感
・倫理観



（参照　KJ 法プロダクトの写真）

ⅢＡ班

第二部セッションⅠでは、「６年間の薬学教育の中で身についたこと」について、KJ法を利用して、ディスカッションを行った。

【議論の経緯】

①情報の整理とグループ化

最初に、今回のテーマである「６年間の薬学教育の中で身についたこと」について、KJ法を利用し、各自が思いつくものをそれぞれカードに記載した。その結果、合計57のカードが集まり、１つ１つのカードについてその意図を共有し、情報を整理した。

続いて、各々のカードをグループ化した結果、「薬学知識」、「自己研鑽」、「研究能力」、「習った知識を応用する」、「患者志向」、「手技」、「多職種連携」「処方解析」の合計８つのグループに分けることができた。また、どこのグループにも属さない独立カードが５種類あった。

②関連付け

上記の「患者志向」、「手技」、「多職種連携」、「処方解析」は実習中に修得したことであったので、これらをまとめて「実習で学んだこと」というグループに統一した。したがって、最終的には５つのグループと５種類の孤独なカードに分類した。以下に分類したグループ名と各々のカードの内容を記す。

グループ１「薬学知識」

- ウイルスの感染経路
- 常に処方箋を疑う姿勢が大切
- 薬の作用機序
- 薬害は“人災”であることを知った
- 禁忌や相互作用を知る
- 病気の治し方
- 薬の相互作用、副作用などの薬学的知識

グループ２「自己研鑽」

- 皆で刺激しあうクセ
- 時間の使い方
- 医療のニュースを見るようになった、
- 最後までやりきる根気
- 全部覚えるのではなくPoint Pointを押さえること
- 自分で考えて動くようになった
- 知識をアップデートする能力
- 分からないことをすぐ聞くこと
- 自分が何について強いのかなど自分の長所を見つけられた
- インプットだけでなくアウトプットすること、
- 将来図を組み立てて今何をすればいいのかという考察力を身に付けた、
- 日々努力するクセ

グループ３「研究能力」

- 研究者になるための基礎・基本
- 分析装置の使い方を知った
- プレゼンテーションの作り方・まとめ方
- 研究の方法とまとめ方
- 英語の論文を読むことに慣れた
- 論文の読み方
- 論文の探し方と書き方
- 論文を読んで問題解決に努める
- 論文発表会での質疑・応答の仕方

グループ４「実習で学んだこと」

小グループⅰ「患者志向」

- お年寄りとのコミュニケーション能力
- 相手の目を見てあいさつ
- 患者さんに接する時の適切な姿勢
- あいづちの仕方
- がんとそれ以外の疾患の患者心理の違い
- 患者側の気持ちを考える
- 治せばいいのか?と考えるようになった

小グループⅱ「手技」

- 正しい手洗いの仕方
- 手洗いや専門性が高い技術を学べた
- 調剤の方法を学べた

小グループⅲ「多職種連携」

- 他学部と交流して連携をとる能力
- 薬剤師の立ち位置
- 他職種と連携することの必要性
- チーム医療の中で薬剤師に期待されていることは何か
- 医療現場の実際を見た
- チーム医療に参加することの重要さ
- 薬局以外の薬剤部の役割

小グループⅳ「処方解析」

- ガイドラインを参照すること
- 処方箋・保険証の見方
- 処方の読み方

グループ５「習った知識を応用する」

- OTC を買うときに中身を見るようになった
- 添加物をみるようになった、
- 家族等のクスリをみるようになった
- 周りの健康についても考えるようになった

独立カード

- 必要な情報を集める能力
- ビジネスメールの書き方
- 海外・異文化の人との接し方を学んだ
- 問題の見方・考え方
- お薬手帳を持って行くこと

③図式化

上記の各グループのカードの内容を１～６年生のどの段階で修得したかを考えた。まず、最初に「薬学知識」を学び、学年が上がり卒業研究や実務実習を行うことで「研究能力」や「実習で学んだこと」に関する多くのことを身に付けていったと考えた。「自己研鑽」は最初に基本として身についたのか、それとも学年が上がったときに身についたのかという議論になったが、「自己研鑽」は最初から最後までずっと継続して身についていくものという結論に至った。また、「習った知識を応用する」は学年の上位で修得したと考えた。

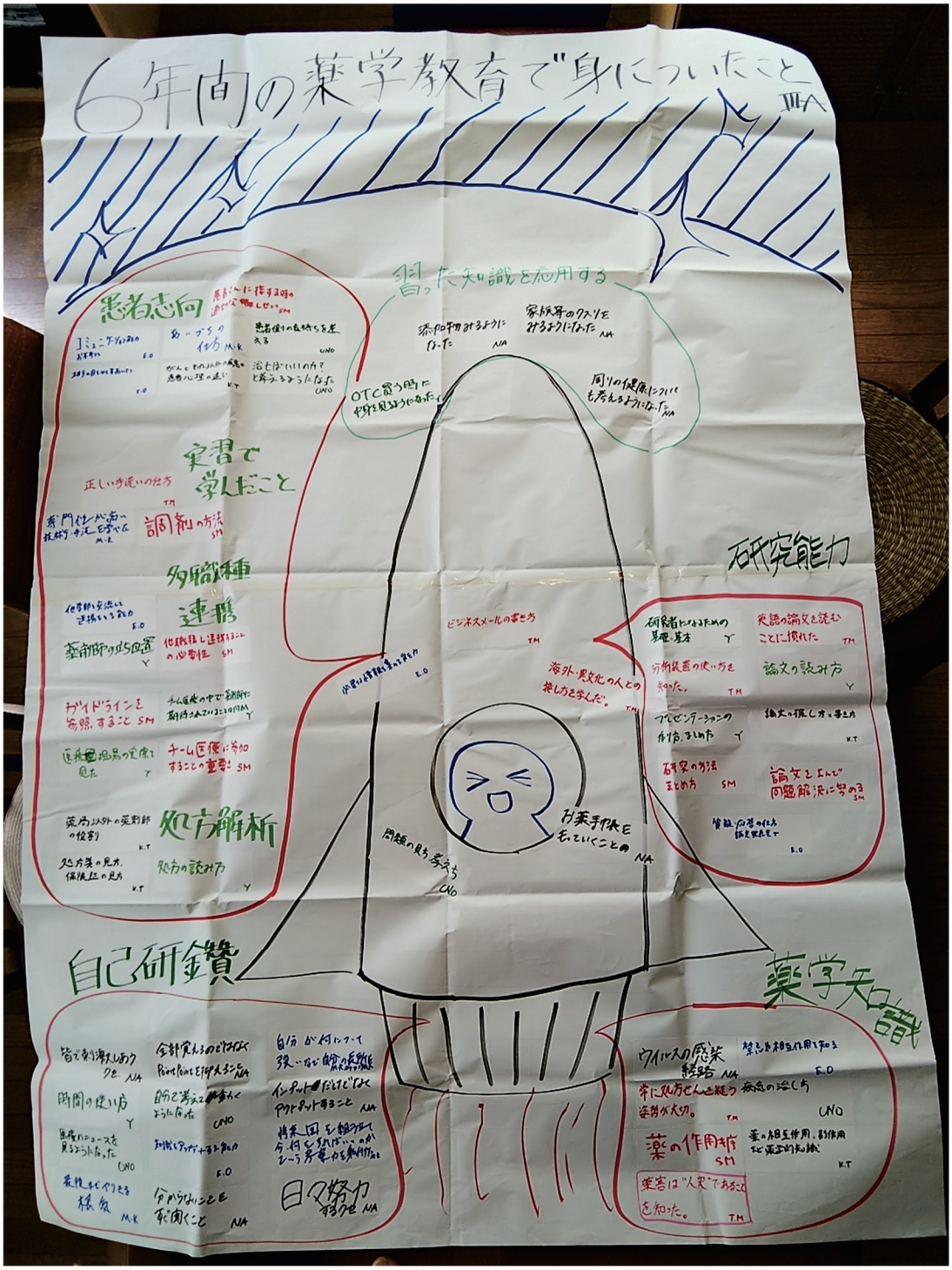
この各グループの段階をわかりやすい絵で表現するには、何が適しているのかという話し合いになり、山や坂道などの意見も出たが、“これから未来に羽ばたく”という願いも込めて、ロケットにしようという案が出た。プロダクトの図の内容の話し合いの結果は下記のようになった。

まず、われわれ薬学生１人１人を、６年間の薬学教育というロケットに乗り込む宇宙飛行士に例え、そのロケットを飛ばすために、今回ディスカッションした“身についたこと”を燃料とし、必要なものをロケットに詰め込む作業がこの６年間であるとした。最初に薬学知識を学び、能動的に動く自己研鑽能力を取得し、それらをベースにして、年次があがっていくと卒業研究を通して研究能力を学び、そして実務実習で机上に勉強だけでは学べない多くのことを身に付けた。加えて、少しずつではあるが、学んだ知識を日常生活に応用している。これらの燃料を乗せて、社会という大きな宇宙に今飛び立とうとしているが、飛び立つためには薬剤師国家試験の合格が必要であり、ロケットはまだ着火していないことにした。このロケットは飛び立った後再び地球に戻り、得た能力・知識を還元すると考えた。

発表後の質疑応答について

質疑応答では、グループ４の小グループｉ「患者志向」の“治せばいいのか?と考えるようになった”とはどういう意味なのか、という質問があった。これは 80 代後半のおばあさんに対して抗がん剤による治療は本当に必要なのか、という疑問に実務実習中に遭遇した結果考えるようになったもので、薬を投与することだけが治療ではないと感じたエピソードによるものである。この経験により、薬剤師としての患者へのアプローチの仕方についてより深く考えるようになったという意味である。

【プロダクト】


6年間の薬学教育で身についたこと
患者志向
実習で学んだこと
多職種連携
処方解析
自己研鑽
得た知識を応用する
研究能力
薬学知識
日々努力
薬の作用機序

Ⅲ B 班

【議論の経緯】
「6 年間の薬学教育で身についたこと」について KJ 法を利用して議論を行った。
①意見の収集
　各自の意見をカードに書き記し、それを集めて類似性の高いものに分類した。分類名及び意見を以下に示す。

「コミュニケーション能力」
・コミュニケーション能力

「忍耐力」
・体力
・忍耐力

「倫理観」
・倫理観
・医療人としての倫理観
・言葉の選択
・人の命を預かることへの責任感

「チームワーク」
・チームワーク
・協調性

「知識」
・薬学的知識
・専門科目の知識
・薬の知識
・薬に対する理解度
・調剤
・化学、物理、生物など薬学の基礎となる知識
・薬学以外の知識

「考える力」
・考える力
・対応力
・論理的思考
・臨機応変な対応力

「情報収集」
・情報収集の大切さ
・情報収集能力
・検索力

「評価」
・得た情報を評価する力

「解決力」
・課題解決能力
・疑問を明らかにする力

「共感」
・人の気持ちを考える習慣
・患者さん目線
・人に対する優しさ
・傾聴
・共感する力
・人の気持ちを考えること

「指導力」
・薬の服用法、指導　　・人に教える力
・指導力　　・情報提供能力
・話す力　　・人前で話すこと
・専門知識を用いて患者さんに分かりやすく伝えることの大切さ

「伝える力」
・考えを伝える力　　・プレゼンテーション能力
・人前での発表

「研究」
・研究の進め方　　・研究マインド

「向上心」
・知識の向上心　　・薬の情報に敏感になった

「孤独なカード」
・計画性（力）　　・積極性
・コンプライアンス向上を意識した薬剤の選択

②図式化

集まった意見のうち、「コミュニケーション能力」、「忍耐力」、「倫理観」、「チームワーク」については、薬剤師に限らず社会人として必要不可欠な能力であり身につけておくべきである点から、これらを全ての『基盤』として、模造紙においては木の根元で表現した。

臨床の現場においては患者や他の医療従事者から質問を受ける機会がある他、解決すべき壁に衝突することも多いと思われる。それらに対応するという意味でも、情報を収集する能力は重要である。情報はただ集めるだけでなく、その内容が適切であるかを「評価」しなければならない。「情報収集」、「評価」、「解決力」といったものは薬剤師としての業務を支えるものとして木の幹に例えた。薬学的知識や調剤業務といった「知識」は修得して然るべきものであり実際に身についたものとして多く意見が出た。また、論理的思考力や臨機応変な対応力のように「考える力」に分類されるものも、昨今の国家試験の傾向を見てわかるように薬剤師に求められるものである。「知識」や「考える力」についても薬剤師業務を支えるもので、情報収集・評価においても必要な能力であり、図中では枝の部分に配置した。幹や枝にあたる能力は決して表立つものではないが、薬剤師が薬剤師として活躍するために欠かすことのできないファクターであり、これらを『地味スゴ』という大きな分類で括った。

実務実習における服薬指導を通じて、自分の持っている情報を相手に「伝える力」や相手の気持ちを考え「共感」する力が身についたという意見が多く出た。服薬指導における患者への「指導力」、人への「共感」、自らの考えを「伝える力」は、「知識」や「情報収集・評価」の能力とは対照的に表立つ能力であり、図における樹幹の部分に配置し『派手スゴ』と表現した。「伝える力」については服薬指導のみならず研究発表の場でも求められるものであり、特に重要な能力であると考えた。

薬剤師としてさらに成長していくためには、卒業研究を行うことで身につけた「研究」マインドや、さらに上を目指そうとする「向上心」が必要となってくる。それらを空へと羽ばたく蝶の姿に例え、『未来へ飛ぶ』様子を表現した。

【実際のプロダクト】


6年間の薬学教育の中で身についたこと Ⅲ-B
未来へ飛ぶ
研究
積極性
向上心
伝える力
指導力
共感
傾聴
共感する力
話す力
人前での発表
人前で話すこと
考える力
論理的思考
対応力
評価
解決力
疑問を明らかにする
薬学的知識
調剤
知識
情報収集
検索力
倫理観
チームワーク
コミュニケーション能力
忍耐力
計画性(力)
責任感
派手スゴ
地味スゴ
基盤Ⅲ

Ⅲ C 班

【方法】

6 年間の教育を振り返り、6 年間の教育で修得できたことに関して KJ 法を用いて、議論した。初めにメンバー個々がテーマに関して考えた事柄をカードに記し、情報を抽出した。その後、司会者が全てのカードの内容を読み上げ、メンバー全員で各カードの内容を共有し、類似した内容ごとに”島”を作り、整理した。その後、島への名札付けを行い、島同士の関係性についても議論し、プロダクトを作成した。

【議論の経緯】

「6 年間の薬学教育の中で身についたこと」というテーマに基づき、班員 7 人が各々の意見を書き出し、48 個のカードを作成した。類似した内容ごとに島を作る話し合いの中、「コミュニケーション」に関連した島が多いことに気づいた。そこで、「コミュニケーションは何をもって言うのか？」という議論を行い、コミュニケーションは、受信と発信から成り立つと考えた。これより、カードの内容をコミュニケーションにおいて、受信もしくは発信のどちらに関連しているかで分類を行い、さらに発信と受信のそれぞれを基礎と応用に分類した。受信の基礎には、受信をする上で基本となる「聞くこと」に関するカードを分類し、発信の基礎には、発信する上で基本となる「話すこと」に関するカードを分類した。また、受信と発信における応用には、基本的な力を発揮し出来たことに関するカードを分類した。これより、コミュニケーションを中心としてデザインを検討し、受信と発信の土台の上でキャッチボールしている様子に表現することとした。

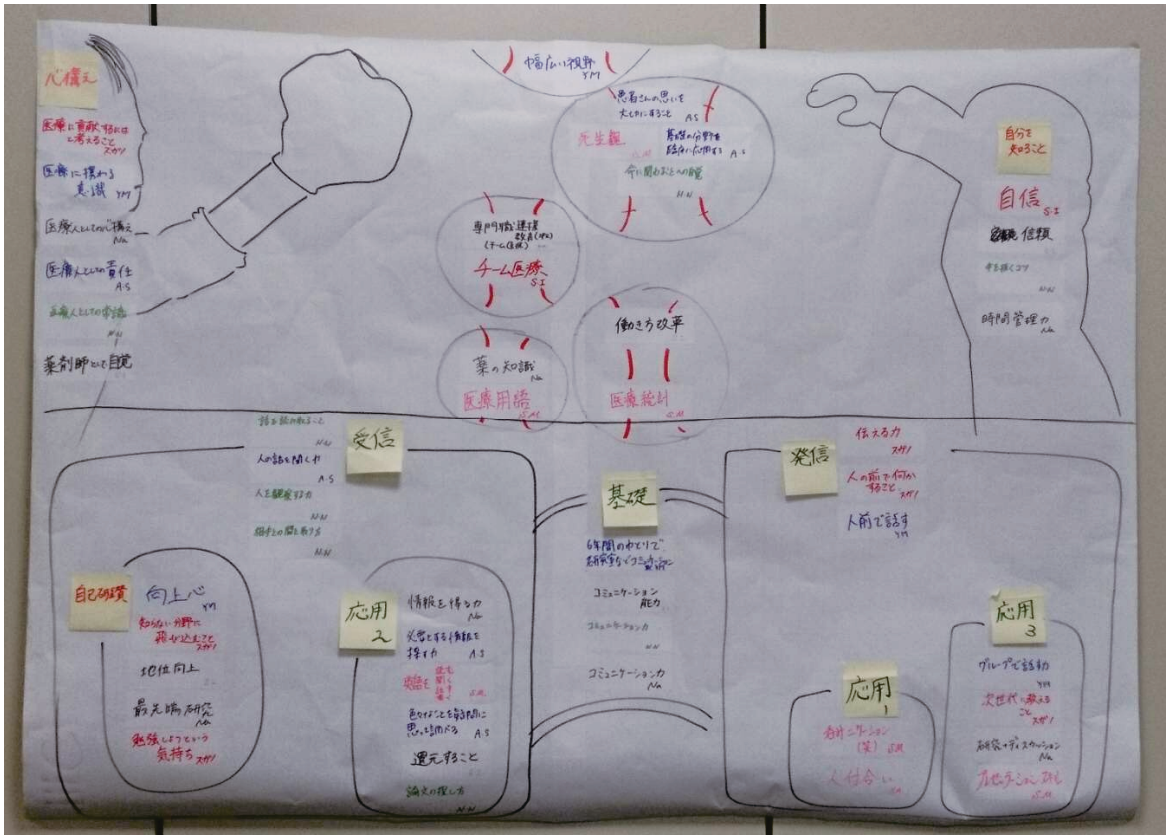
【島の内容】

心構え
・医療に貢献するにはと考えること ・医療に携わる意識 ・医療人としての心構え ・医療人としての責任 ・医療人としての常識 ・薬剤師としての自覚
自分を知ること
・自信 ・信頼 ・手を抜くコツ ・時間管理力
自己研鑽
・向上心 ・知らない分野に飛び込むこと ・地位向上 ・最先端研究 ・勉強しようという気持ち

コミュニケーション（基礎）
・6 年間のゆとりで研究室などコミュニケーション ・コミュニケーション能力 ・コミュニケーション力
コミュニケーション（受信・基礎）
・話を読み取ること ・人の話を聞く力 ・人を観察する力 ・相手との間の取り方
コミュニケーション（発信・基礎）
・伝える力 ・人の前で何かすること ・人前で話す
コミュニケーション（発信・応用）: 応用 1
・呑みニケーション ・人付き合い
コミュニケーション（受信・応用）: 応用 2
・情報を得る力 ・必要とする情報を探す力 ・英語を読む・聞く・話す・書く ・色々なことを疑問に思って調べる ・還元すること ・論文の探し方
コミュニケーション（発信・応用）: 応用 3
・グループで話す力 ・次世代に教えること ・研究+ディスカッション ・プレゼンテーションスキル
孤独なカード
・幅広い視野
コミュニケーションツール：倫理観
・患者さんの思いを大切にすること ・死生観 ・基礎分野を臨床に応用する ・命に関わることの自覚
コミュニケーションツール：チーム意識
・専門職連携教育（IPE） ・チーム医療

コミュニケーションツール：座学知識
・薬の知識 ・医療用語
コミュニケーションツール：地域情勢
・働き方改革 ・医療統計

【プロダクト】



第二部
「6 年制薬学教育を通して、満足したこと、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」

セッションⅡ

「６年間の薬学教育の中ではできなかったこと」



第二部
セッションII

6年間の薬学教育の中では
できなかったこと

第一部では、

World Café

私たちの歩み：
過去、現在、そして未来

- イメージしていた薬学部
- 大学生活で印象に残ったこと
- 私の夢

第二部セッションIでは、

ＫＪ法

6年間の薬学教育の中で
身についたこと

6年間の教育で修得できたことの
抽出と整理ができました

6年間の薬学教育の中では
修得できなかったこと

これからの作業は、

1. 司会、記録、発表、報告書担当の4役を決める
2. SGD プロダクトの作成(パワーポイントで)

薬剤師として求められる基本的な資質

豊かな人間性と医療人としての高い使命感を有し、生命の尊さを深く認識し、生涯にわたって薬の専門家としての責任を持ち、人の命と健康な生活を守ることを通して社会に貢献する。

6年卒業時に必要とされている資質は以下の通りである。

- （薬剤師としての心構え）医療の担い手として、豊かな人間性と、生命の尊厳についての深い認識をもち、薬剤師の義務及び法令を遵守するとともに、人の命と健康な生活を守る使命感、責任感及び倫理観を有する。
- （患者・生活者本位の視点）患者の人権を尊重し、患者及びその家族の秘密を守り、常に患者・生活者の立場に立って、これらの人々の安全と利益を最優先する。

- （コミュニケーション能力）患者・生活者、他職種から情報を適切に収集し、これらの人々に有益な情報を提供するためのコミュニケーション能力を有する。
- （チーム医療への参画）医療機関や地域における医療チームに積極的に参画し、相互の尊重のもとに薬剤師に求められる行動を適切にとる。
- （基礎的な科学力）生体及び環境に対する医薬品・化学物質等の影響を理解するために必要な科学に関する基本的知識・技能・態度を有する。
- （薬物療法における実践的能力）薬物療法を主体的に計画、実施、評価し、安全で有効な医薬品の使用を推進するために、医薬品を供給し、調剤、服薬指導、処方設計の提案等の薬学的管理を実践する能力を有する。

- （地域の保健・医療における実践的能力）地域の保健、医療、福祉、介護及び行政等に参画・連携して、地域における人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献する能力を有する。
- （研究能力）薬学・医療の進歩と改善に資するために、研究を遂行する意欲と問題発見・解決能力を有する。
- （自己研鑽）薬学・医療の進歩に対応するために、医療と医薬品を巡る社会的動向を把握し、生涯にわたり自己研鑽を続ける意欲と態度を有する。
- （教育能力）次世代を担う人材を育成する意欲と態度を有する。

このセッションでは、

・6年間の薬学教育の中では修得できなかったことに関して、どのような授業・演習・体験があれば修得度が上がったと思いますか？
・どのようなプログラムを受けたかったですか？

といったようなことを議論して、
プロダクトを作成します



このセッションでは、

・どのようなプログラムを受けたかったか、個人の経験をグループで共有して下さい。

・大学での「授業・演習科目名：学習のねらい、授業概要」を作って下さい。
・その授業・演習の「シナリオ(授業・演習の場面)を作って下さい。



プロダクトはパワーポイントで

第二部セッションII　　oo班

科目名	
学習のねらい	
授業概要	
シナリオ	

第二部セッションII　プロダクト例　　oo班

科目名	タクシードライバー養成安全運転実習・演習
学習のねらい	人の命を預かり、公共の保安を担っていることを意識し、交通ルールを遵守して安全運転を行うために必要な技能と態度を養う
授業概要	乗客の背景を考慮して、ドライブシミュレーターで運転を模擬的に示しながら、学生同士での評価を取り入れた実習・演習形式
シナリオ その日の実習・演習のテーマは、「その客は、70歳ぐらいの男性で、雨の日の夕刻、聞こえるか聞こえないか程度の小さな声で行き先を告げる。あまり行ったことのない行き先で、乗客はたいへん急いでいる様子で慌てている。」その後、ドライブシミュレーターで行先までの運転を示し、学生同士で運転や接客について話し合い・・・・	

作業時間は100分間

17:00　集合

・発表 5分 討論 5分 x 3班
・発表順　B ⇒ C ⇒ A

ＩＡ班

「６年生薬学教育を通して、満足したこと、もっと伸ばしたかったこと、やり残したこと」 セッションⅡ「６年間の薬学教育の中でできなかったこと」

以上のテーマに基づき、グループ内で議論を重ねた後発表を行った。

【方法】

初めに 15 分程度で、病院・薬局での実務実習における実体験や学生生活で感じたこと、各々の経験をもとに、「６年間の薬学教育の中でできなかったこと」について自由に意見を述べ、列挙した。その意見の中で、グループ全体として共通する部分の多いテーマを選定し掘り下げた議論を行った。グループで決定した事柄は、６年間の薬学教育の中でできなかったことが実現できる授業プログラムの内容および目的、授業概要と具体例についてであった。

【議論の経緯】

列挙された意見は一般用医薬品の知識不足により、患者に応じた適切な受診勧奨ができない、チーム医療での他の職種の業務や理解が把握しきれていない、現在のカリキュラムでは教育能力が身につかない、災害時および救急時における薬剤師の役割を学ぶ機会は単発的であり継続した学習環境がない、など多岐にわたった。

その中で、多職種からなるチーム医療で専門性を発揮できる薬剤師は社会から求められているという背景やグループ全体のテーマに対して気持ちが最も強いという理由から、我々はチーム医療をテーマとして決定した。

テーマの決定後、まずは授業プログラムの目的を明らかにし議論の方向性を決めることに努めた。目的は多職種の業務および思考をお互いに理解することと満場一致となったため、「チーム医療における多職種の相互理解を深めるとともに、薬剤師として求められる職能を再認識する」とした。

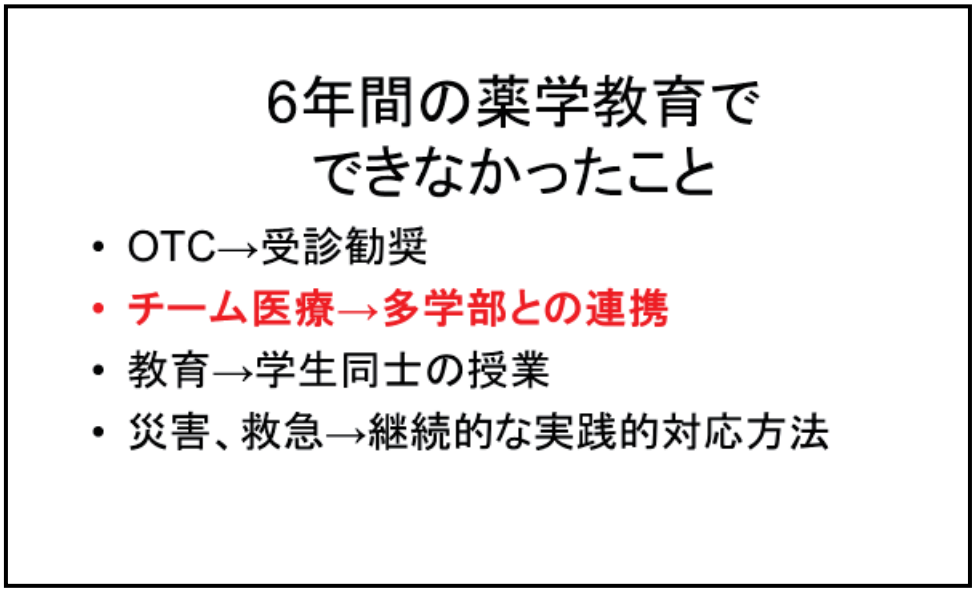
多職種とは医師、看護師、薬剤師を表し、３職種が集まることを前提とした。授業形式は同一の症例に対して同職種のみで議論、その結果を他職種に向けて発表することで、職種により異なる患者へのアプローチ法からお互いを理解するという意見がでた。その一方で、同一症例を異職種間で話し合い、議論のなかから相互理解を深めようという意見もでた。そこで、我々は同職種同士での議論も重要であるが、他職種が出す結論のみならず、その結論に至った思考を知ることも必要であると考えた。その結果、概要は SGD 形式とし同一の症例に対して各学部のグループで検討した後、多学部混合グループを再構成して検討内容を話し合うこととした。

目的、概要と枠組みが決まったところで、次に掘り下げた内容について議論した。対象とする各学部は何回生とするのか、同職種および多職種からなるグループは何人構成とするのかなどについてである。大学により他学部と交流することはあったが、まだ薬剤師の業務や医療の全体像が見えていなかったため、あまり身にならなかったという意見が挙がった。そのため、各々の専門職の知識が定着していない低学年で実施するのではなく、一定の基礎知識が身に付いた高学年を対象にするという意見で一致した。そのため、薬学部は実務実習を終えたあとの５回生を対象とすることにした。同職種間グループの人数構成は６人とし、そして各職種の２人ずつが集まり、計６人の多職種グループを構成するものとした。これは、ディスカッションにより意見を交わしやすく、同職種が２人入ることで各職種の意見が上手く伝達されると考えたためである。

授業内容の一例としてあげる症例は患者の希望が入っている。患者の希望を明確とする

ことは、一つのゴールに向けて各職種が「何を問題と捉えているか」、「どのような行動をすべきか考えているのか」をより深く知ることに繋がると考えたためである。
　上記の流れで議論は進み、セッションⅡを終えた。

〈総括〉
個人では思いつかないような意見も多く挙げられ、グループ内で活発に意見交換できたと思う。議論を続ける中で、今の自分達にはできないこと、足りないことに多く気づかされた。学生生活を振り返り、何が足りないかを考えるだけでなく、その解決策を自分達で考えた経験は問題解決能力を養うことに繋がると思い有意義に感じた。



第二部セッションII　　IA班

科目名	チーム医療演習
学習のねらい	チーム医療における多職種の相互理解を深めるとともに、薬剤師として求められる職能を再認識する
授業概要	同一の症例に対して各学部のグループで検討した後、多学部混合グループを再構成して検討内容を話し合うSGD形式
本日の症例は「60代、男性。COPDの既往歴あり。数年前から労作時に息切れ、動悸を覚えるようになった。・・・患者は○○○することを望んでいる。」この症例に対して、まず薬学部内の各グループで薬学的見地から問題解決方法を検討する。そのあと多学部混合でグループを再編成して、各学部の検討内容について共有して再検討する。	

ＩＢ班

今回のセッションでは、６年間の薬学教育の中でできなかった資質について意見を出し合った。その中から最も得られていないと考えられた「教育能力」についてのプロダクトを作成し発表を行った。

［議論の経緯］

先ず始めに６年卒業時に必要とされる資質を参考に、6 年間の薬学教育の中で得られなかった資質について挙げた。

プロダクト①

・教育能力←受けた記憶がない
・漢方 実際の使い方
・在宅 必ずできるかは違う 包括ケア ターミナルケア 他職種連携
・芸術 音楽 美術 art in hospital
・チーム医療 他学部との関わり
・病気の知識 処方意図 一般人から聞かれて答える
・栄養面
・人体解剖 イメージがつく
・基礎科目 実際にどこで化学反応が使われるのか→文章では分かりにくい

教育能力

教育能力を養う講義、演習はなかったという意見で全員一致した。

漢方

漢方薬を臨床でどのように使用するのか身についていない。漢方の処方には地域差があり、漢方に多く触れることのできた地域（富山県）もあった。

在宅

実習機関により在宅をどのくらい経験できるかに差がある。包括ケア、ターミナルケアでは死との向き合い方を踏まえる必要がある。

芸術

音楽療法や医療機関の art など、目に見えないが人の心を癒やす芸術に触れる講義が欲しい。実習でのアロマ療法が心に残っている。

チーム医療

薬学部は他学部の学生との関わりが少ない。総合大学では他学部との交流がしやすいが、薬学部のみの大学等では、他学部との関わりが希薄である。他学部の学生と関わる講義が欲しい。そのためには都道府県下の大学での連携を図る必要がある。

病気の知識

一般の人から聞かれることに答えるまでの理解が得られていない。

栄養面

栄養についてもアドバイスできるような知識が必要である。

人体解剖

人をみるという意識を高め、人体を直接見ることでイメージがつくため、と薬学教育にも人体解剖の講義が必要ではないか。

基礎科目

化学反応を習ってもその反応が実際どこで使われる反応なのか分かっていない等、基礎科目の知識と実臨床の繋がりが把握できていない。若い年次の基礎科目で臨床を意識した講義をすることで、基礎科目にもより面白さが湧くのではないか。

以上の意見が挙げられ、私たちはこの中から特に習得できなかったと感じた「教育能力」についてのプログラムを考えプロダクトを作成した。

プロダクト②

科目名	薬剤師教育実践実習
学習のねらい	教育方法を学び正しい知識を提供し，現場で活躍できる薬剤師を育成できる技術と態度を養う。
授業概要	相手に分かりやすく提供するに当たり必要な教育論を座学にて学ぶ。これまでの知識・経験に基づき，与えられたテーマに沿って，４年生に対し教育実習を行う。
シナリオ 教員が作成した模擬処方箋などの資料を用いて，自らが指導内容を考え，実践する。 テーマ例:「検査値からの患者へのアプローチ」 「模擬処方箋を用いた服薬指導」	

現場では実習生を教育することを踏まえ、実務実習を終えた６年生が実務実習経験のない４年生に教育をするというプログラム設定とした。

学生自ら教育テーマを考えるという意見もあったが、評価方法が難しくなることを考慮し、与えられた模擬処方箋等をどのように教育実習するかを各学生が考え実践するシナリオにした。

初めから教育を実践することは困難であるという意見により、プログラムの前半は教育方法を学ぶ座学を取り入れることにした。教育方法を学んだ後、テーマに沿って教育内容を考え資料等を集め、実践型の教育を行うというプログラムを作成した。

謝辞

有意義なディスカッションを経験させて頂きました。ご指導賜りましたタスクフォースの先生を始め関係者の皆様と参加者の皆様に感謝申し上げます。

ＩＣ班

学生時代にできなかったこと
・他職種との連携が少なかった。
　どこまで薬剤師がやっていいのか分からない。（明文化できない）

・体の仕組みをもっと知りたい。
　病態の理解が不足している。

・臨床で使える知識(症例検討)を学びたい。

・インスリンなどの使い方を知りたい。
　事前に大学で学んだ方が効率的に実習で使えると思う。

・教育する機会があって欲しい。

・実践的能力（応用力）を身に付けたい。
　薬によって作用が違うものがあるため頭で考えて実践する力を身に付けたい。

・研究能力を身に付けたい。
　１年は基礎知識で２、３年は研究して卒論という流れが多くもっと研究する時間があってもいいのではないか。

・ビジネススキルを身につけたい。
　経営とは…。コストに対する考え方(現実的な考え方)を知れば患者側(医療費を払う)にも繋がると思う。

・実務実習の知識の偏りがある。
　みんなでシェアしてはどうか。・身寄りがない人やお金がない人についての話を聞いて知識を増やしたい。

　私たちの班では特に教育について学びたいという意見が多かった。学生時代は自分で教えるという機会が少なく、みんなに自分が思っていることを教えることは難しいと思うので教育能力を身に付ける機会があって欲しいという意見が出ました。

【プロダクト】

大学でどのようなプログラムを受けたかったか

・他職種への理解（合同実習、企業の見学）
・臨床で使える知識
・インスリンの使い方、自己注射の仕方
・教育能力
・実践能力
・研究能力
・ビジネススキル
・コミュニケーション能力、情報のまとめ方
・実務実習の知識の共有

第二部セッションII　　1C班

科目名	薬学を用いた実践型教育演習
学習のねらい	地域社会への貢献を通じて、次世代を担う人材を育成する意欲と態度を習得する。同時に、人々に有益な情報を提供するためのコミュニケーション能力を習得する。
授業概要	次世代を担う中高生へ向けた講義の内容と、伝え方についてのSGDを行い、実際に講演する。学生同士、および聴衆からの講演の内容についての評価を取り入れる。【実習・演習形式】
シナリオ 当日までに話し合って準備した「OTC 医薬品の正しい使い方」について、パワーポイントで作成した資料を用いて講演を行う。高校生の理解度に合わせ、専門用語を使わず伝える。高校生に実物に触れてもらい、質問も受け付ける参加型の講演。終了後、アンケートを回収し、後日評価を行う。	

Ⅱ A班

議題：「6 年間の薬学教育の中ではできなかったこと」
・どのような授業・演習・体験があれば修得度が上がると思っているのか
・どのようなプログラムを受けたかったのか

【議論の経緯】
①プログラムの提案、方向性の決定
　まず初めに、個人がこれまで受けてきた薬学教育の中で、学べなかったこと、より深く学びたかったことを個人の経験などを踏まえて提案し、どのような方向にもっていくのか決定した。以下に提案されたものを記述する。
・災害医療の知識を得る…被災現場を経験した薬剤師から話を聞き、震災や浸水などの自然災害によってライフラインなどが寸断されたときに自分たち薬剤師にできることを考え、実際に災害を想定し実践してみることで、緊急時の対応能力や被災現場では何が必要なのか、自分たちにできることを知ることができると考えた。
・他学部とのワークショップ（医、歯、看護、栄養等）…同じ症例について各々の専門的な視点で話し合いをすることで、チーム医療での距離感をつかむとともに、他の医療従事者がどのようなことを薬剤師に求めているのかを知り、逆に薬剤師が考えていることや薬剤師にできることを知ってもらうことで、患者に対し円滑により良い医療を提供することができると考えた。
・子供、高齢者に対するより実践的な服薬指導…薬の味（甘い、苦い)、飲みやすさについて自分自身で体験することで、患者の立場に立った服薬指導をすることができると考えた。
・各実務実習で学んだことのフィードバック…実習施設によって学べることに差が生まれている（総合病院の門前の薬局と個人の診療科の門前では扱う処方箋に差がある)。これを解消するために情報の共有をすることができると望ましいと考えた。
・伝えるべき SE の選択…患者の中には薬物治療などを怖がる人がいる。プロファイリングを学び患者の不安を聞き出すことで、患者の特徴を薬歴等に記録し情報の共有をすることができ、治療方針の説明や服薬指導などを行う際にその患者に合った対応をすることができると考えた。
・地域の保健医療・健康増進への関わり…実際に行われている健康サポート薬局や医療カフェ、薬局に来やすい環境作りについて学ぶことで、地域の健康にどのように関わっていくのかを模索することができると考えた。
・外国人への服薬指導…国際化が進み、数多くの外国人が治療を受ける時代で正しく服薬指導ができるかどうか。
・外国の薬剤師、薬局の現状について…業務の国際比較をしてみたい。
・薬局の経営的視点の獲得（薬学経営）…経営者の話を聞くなどして経営について学ぶ。
・薬学教員について学ぶ…博士課程に進む学生が少ないのは研究意識が不足してきているからではないかと考えた。教育能力についても養うことのできる授業があればと考えた。
・一般人に薬剤師について知ってもらうためにはどのようにすれば良いのか。
　意見を出し合った結果、多数の人が関心を持った『災害医療について他学部とのワークショップを行う』というテーマに決定し、話を進行した。

②学習のねらいと授業概要の決定

具体的にどのようなことを授業に取り入れるのか､なぜこの授業が必要だと思ったのか､どういったことを学べるのかを追求した。以下に提案されたものを記述する。

〈学習のねらい〉

◎災害大国である日本で災害が起きてからでは遅い。準備しておく必要がある。

・医薬品の流通（卸）・供給方法を知る。
・停電等のライフラインが寸断された場合どのようなことが起こり、どう対処するのかを知る。
・現場のニーズの変化を知る。（経過日数）
・災害前にしておくべき対策と災害発生時の対応方法を知る。
・取扱いに問題がある医薬品への対処（麻薬、毒薬、向精神薬等）について知る。
・患者の情報公開の範囲（お薬手帳、薬歴等）を知る。

〈授業概要〉

（１）体験者（DMAT 等）の話を聞く。（知識）
→過去の災害を知り、将来起こりうる事態を知る。

（２）実際に演習形式で体験する。（技能）
→地震、大雨洪水などの自然災害を想定してシミュレーションする。

（３）体験してみてわからなかったことを調べる。（知識）
→医薬品の流通、取扱いの法律等を調べる。災害の種類によって必要となる物資が変化するため、医薬品の選択、代替品の使用方法を知る。

これらの討議中に２つのプロダクトを作成することが決定した。１つ目では薬学生のみで行った場合､２つ目では他学部との合同で行う場合とした｡他学部も１つ目の症例を各々でシミュレーション行ったのち２つ目を行うことを前提とした。時間の関係上プロダクトを２つしか作成できなかったが、この授業ではあらゆる状況を想定して演習を行うことができた。

③シナリオの決定

シナリオを作成するにあたっては、災害時の様々な状況を想定しながら実際に演習形式で体験することに焦点を絞り作成した。以下に提案されたものを記述する。

・日時（季節）や時間帯（朝・夜・通勤時等）に災害（地震、大雨による洪水等）が発生した。
・交通網の遮断（物資の流通、供給等）
・ライフラインの寸断（停電等）⇒連絡手段、情報の共有方法等
・薬剤師の活動場所（避難所等）⇒経過日数による違い（発生直後、数日後等）や立場（被災者、DMAT、卸等）
・患者の状態（外傷、持病等）⇒今ある薬剤での対応しなければいけない状況

【プロダクト】

6年間の薬学教育の中ではできなかったこと

- 薬局の経営的視点の獲得
- 地域の保健医療絵の関わり
- 災害医療の知識を得る（被災した薬剤師から話を聞き、出来ることを考える）
- 外国人への服薬指導
- 他学部とのワークショップ（医、歯、看、栄養等）
- 実践的服薬指導（薬の味、伝えるべき副作用（SJS等））
- 薬剤師の職務を知ってもらい方
- 薬剤師業務の国際比較
- 各実習施設で学んだことのフィードバック（自分の実習先で得られなかった知識を補う）

第二部セッションⅡ　　ⅡA班

科目名	災害時における薬剤師の役割①　【高学年対象】
学習のねらい	災害大国日本において、国民の医療を担っていることを意識し、災害時に薬剤師として取るべき行動・知識・技能を身につける。
授業概要	薬剤師として災害時の医薬品の取り扱いや流通に関する知識を身につける。災害時の対処法を学ぶシミュレーション形式
シナリオ 〇月〇日△時△分に〇〇で地震が発生。道路の寸断、停電等が発生しライフラインが断たれた。□時に避難所で外傷のある患者への対応が求められた。熱傷患者1名に対して現在ある薬剤で対処する必要がある。お薬手帳を持っていなかったが、消毒液にアレルギーがあるとの情報が得られた。薬学的にどのように対処するか検討する。	

第二部セッションⅡ　　ⅡA班

科目名	災害時における薬剤師の役割②　【高学年対象】
学習のねらい	災害大国日本において、国民の医療を担っていることを意識し、災害時にチーム医療の中で薬剤師として取るべき行動・知識・技能を身につける。
授業概要	薬剤師として災害時の医薬品の取り扱いや流通に関する知識を身につける。災害時の対処法を学ぶシミュレーション形式
シナリオ 〇〇医科大学、〇〇看護学校との合同演習。〇月〇日△時△分に〇〇で地震が発生。道路の寸断、停電等が発生しライフラインが断たれた。□時に避難所で外傷のある患者への対応が求められた。熱傷患者1名に対して現在ある薬剤で対処する必要がある。各学生1名ずつでチームを組み、情報交換を実践しながら模擬患者に対処する。	

Ⅱ B 班

「６年間の薬学教育の中ではできなかったこと」をテーマに意見を出し合い、どのような授業・演習・体験があれば修得度が上がったのかを議論しました。
その後、大学でのプログラムとして授業・演習科目名：学習のねらい・授業概要、その授業・演習のシナリオ（授業・演習の場面）を考え、PowerPoint を使用しプロダクトを作成しました。

【議論内容】
私たちの班では議論の中で次のような意見が出ました。

・一般名はわかるが商品名がわからない
・目の前で人が倒れたときに薬剤師としてできることを学びたい
・小児や妊婦など添付文書に当てはまらない特殊な患者に対する薬物療法についてもっと学びたい
・臨機応変に対応できる力をつけたい
・実習にかける時間が少なかった
・他の職種の仕事をあまり知らない
・薬剤師の働き方
・実習前の授業と実習後の授業があったらよかった
・大学主催のインターン（MR の仕事体験など）

その中でも、実務実習でできなかったことやもっと学びたかったという意見が多かったため“臨床でしか学べない知識･技術を習得する機会である実務実習をどうすればうまく活用できるのか”ということに焦点を当てて議論を進めていきました。
実務実習をうまく活用できなかった原因として「実習へ行く前の心構えが足りていなかったのではないか」「大学での授業では臨床現場のイメージが持てず、話を聞くだけの受け身な姿勢がよくなかったのではないか」「もっと実習に対する意欲を持って、積極的に取り組めばよかった」などの意見が出ました。また「実習後に情報交換を行うことで実務実習を振り返り、得た知識を再確認する機会もあればよかった」という意見もありました。
そこで今回は、実習に行く前の４年生と実習後の６年生を対象とした授業を考えました。４年生の時点では実習に対するイメージや意欲・積極性、目標が足りていなかったことから、授業は４年生が主体となり実務実習について考え、学びたいこと・目標や臨床現場のイメージを作るものにしようということになりました。
授業内容を考えていく中で「実際実習に行って体験したこと、やり残したこと、やってよかったことを下の学年に伝えることで､より実習を有意義なものにできるのではないか」「答えがあるテーマでは、普段の授業と変わらず受け身になってしまい、考える力がつかないのではないか」という意見が出たため、授業の進め方としては SGD を行い、その議論の結果をお互いに意見交換するということになりました。テーマについては、先生よりも親近感が湧きやすい６年生が考えることで、実習の振り返りができ、また内容について 4 年生の興味も湧くのではないかと考えました。
以上の意見から今回考えたプログラムの内容としては、４年生だけで SGD を行い、考える力・積極的に参加する姿勢を身に着ける。その後２学年合同で意見交換を行い、６年生との視点・考え方の違いを感じ、今の自分に足りないものはなにか認識してもらう。ということで意見がまとまりました。実際に作成したものが次のプログラムです。

【プロダクト】

第二部セッションII　　IIB班

6年間の薬学教育の中で足りないと感じたこと

班で出た意見

・実務実習で出来なかったことを4年生に伝える
・目の前で人が倒れたときに薬剤師ができることは？
・特殊な患者（小児や妊婦など）への対応
・臨機応変に対応する手法
・臨床以外の実習（企業など）
・実習期間の短さ
・現場に行く前のプレ授業
・他の医療人の仕事を知らない
・薬剤師の働き方
・商品名がわからない

科目名	実習意欲向上を目的とした他学年合同 SGD ～6 年生から学ぶ実務実習のポイント～
学習のねらい	4 年生の実習に対する意欲・イメージ・目標を作るとともに問題解決能力・判断力の育成を図る。 また 6 年生は実務実習を振り返る機会とする。
授業概要	6 年生が作成したテーマをもとに 4 年生、6 年生それぞれが話し合い、意見交換を行うことにより臨床で必要な考え方・視点を学ぶ。
シナリオ 「病院・薬局薬剤師の業務内容」「特殊な患者（小児・妊婦など）への対応・考え方」などのように 6 年生が作成したテーマをもとに 4 年生、6 年生それぞれで話し合いを行う。その後 2 学年合同で意見交換し、実際の現場において必要な情報・視点を共有する。4 年生は実習について考えることで、自ら積極的に実務実習へ取り組んでいけるようモチベーションを高めてもらう。また、SGD を通して与えられた問題に対し、どのように対処すればよいのかという問題解決能力・判断力を身につける。 6 年生は実務実習で学んだ知識を再確認すると同時に、実習に学んでほしいことなど 4 年生に伝える機会とする。これにより実務実習を有意義なものにしてもらう。	

ⅡＣ班

【目的・方法】

第二部セッションⅠでは、６年間の薬学教育の中で身についたことを KJ 法で抽出・整理して発表した。第二部セッションⅡでは、個人の経験を踏まえて６年間の薬学教育ではできなかったと感じたことをグループで共有し､それらを学ぶための授業･演習の科目名、学習のねらい、授業概要、シナリオについて議論し、プロダクトを作成した。

【議論の経緯】

６年間の薬学教育でできなかったと感じたことや､やりたかったことについてグループでの議論の結果、以下のような意見が出た。

６年間の薬学教育でできなかったこと、やりたかったこと
・実務実習で幅広い症例を体験したかった
・急性期だけ、または慢性期だけ学ぶのではなく、満遍なく学びたかった
・外国の薬剤師の働き方を見たかった
・都市部と地方ではどれくらい医療に差があるのかを知りたかった
・処方解析、検査、輸液、OTC、漢方、セルフメディケーションなどの知識を４年生（実務実習前）までに学びたかった
・コミュニケーション能力をもっと磨きたかった
・医薬品をどのように使い分けするのかを学びたかった

実務実習で経験した症例に偏りがあったり、経験できない症例があったという意見が比較的多くみられた。経験できる症例は、実習先の病院または薬局によって左右されることが考えられ、実務実習で様々な症例を幅広く、満遍なく経験することは全国的な課題であることが伺えた。また、実務実習の前に、処方解析、検査、輸液、OTC、漢方、セルフメディケーションなどを学んでおきたかったという意見があった。その一方で大学の授業でそれらについて学ぶ機会があったという意見もあり、大学のカリキュラムによって学ぶ事柄に差があることが分かった。

その他に、自身の経験から都市部と地方における医療の差を知りたかったという意見や、日本と海外の薬剤師の働き方を見たかったという意見があった。

上記の意見を踏まえ、今回、私たちの班では、地域別、国別に医療システムの違いを学ぶ授業を考案した。

【プロダクト】

第二部セッションII　　2C班

科目名	地域・国際医療薬学
学習のねらい	国別の医療システムの違いを認識し、また、各地域の薬学社会を取り巻く現状と課題を把握する事で、様々な薬剤師知識と態度を養う
授業概要	実習終了後に、国際的に活躍している薬剤師や各地域の薬剤師を講師として呼び、講演を聞いた後、学生間でSGDを行い、様々な薬剤師の働き方を学ぶ講義・演習形式
シナリオ ① 山間部のとある病院（病床数300、薬剤師3名）に勤務する薬剤師Aを外部講師として招き、日常業務や地域医療についての講演を行った後、地域が抱える課題についてSDGを行う。 ② 海外での実務経験がある薬剤師Bを外部講師として招き、海外の薬剤師業務に関する講演を行った後、SDGを行う。	

○授業の意図

（地域）　各地域の医療の現状や取り巻く課題について学ぶことで、地域医療に関する知識を広げるだけでなく、各地域における医療システムの違いや、自分が住んでいる地域が抱える課題が見えてくる。それらについて SDG を行うことで、薬剤師としての態度や問題解決能力などを養うことができる。
また、実務実習終了後に他の地域の薬剤師業務などを学ぶ機会は少ないため、実習先での経験やイメージが進路選択にも大きく影響すると考えられる。そこで、自分の実習先と比較する機会があることで視野が広がり、より自分に合った進路選択をすることができる期待もある。

（国際）　薬剤師の役割は国によって大きく異なっている。例えば、日本では処方権が医師にあるため、薬剤師は医師の処方箋に従って調剤を行わなければならないが、アメリカでは薬剤師に処方権が与えられており、薬剤師自身が患者に対して薬を処方することができる。このような違いを知ることで日本の薬剤師業務を見つめ直すとともに、今後の日本の薬剤師のあり方についても考えることができる。

ⅢA班

第二部セッションⅡでは、「6年間の薬学教育の中ではできなかったこと」というテーマで討議を行い、その中で受講しておきたかった、受講しておけばためになっただろうという科目を自分たちで考え、パワーポイントにまとめた。討議を行うにあたり、6年間の薬学教育で学んだことと実習に行って座学との違いや、座学では足りなかったことの意見を出し合い、どのようなプログラムの授業を受けたかったかをまとめた。

【足りないと感じた意見の内容】
・薬学英語を話せるようになれなかった
・処方解析・処方提案をできる能力
・OTC 薬の勉強
・患者ごとのコミュニケーション方法
・手話
・主体性をもって動く
・医師とのコミュニケーションの取り方
・心電図の読み方
・解剖見学
・プレゼンテーションやグループディスカッション
・救急・災害時（トリアージや AED など）
・カルテの見方や専門用語の勉強
・実習を実りあるものにできなかった。

病院や薬局実習に出てから、外人、聾患者と出会った際に対応ができない。心電図や処方の読み取りができず最初の２、３週間は何を調べていけばいいか、処方が正しいか誤っているかが読み取れなかった。などの意見が挙がった。私たちの班は上記の意見の中から「実習を実りあるものにできなかった」理由を考え、原因に対処できるプログラムを考えることにした。

【原因として挙がった意見】
・学校で学んだ症例解析は解答があった
・授業で習った知識と臨床で知った知識が違った
・様々な情報の検索の仕方が分からなかった
・OSCE の実技の内容がゆるかった
・実習後に OSCE のような試験が何も無かった

この中で、「情報の検索の仕方が分からなかった」という、授業で用語を知っていても実際に調べ方が分からなかった。などの意見が私たちのグループでは重要視され、情報の検索とその情報の活かし方についてのプログラムについて考えた。

私たちの班は、科目名を 1 日 1 問ファッザニア（キッザニアの薬剤師バージョンの意）とし、薬局でも病院、ドラッグストアでも対応できるような症例問題を実務実習前後に行い、知識の習得の仕方を学べる内容のプログラムを考えた。
情報を検索する授業はあっても検索をする機会がなかったことから、1 日 1 問ずつ症例

問題について、ガイドラインや論文を基として適切な処方内容であるか、処方提案（OTCでは適正な提案や受診勧告）ができるかどうかを考えるシステムがあれば良かったという意見に落ち着いた。OTC 薬も含め授業で触れなくても調べる方法や習慣を身につけることで EBM の考え方を確立し、社会に出ても活かせるようになると考えた。また、全員が同じ問題だと回答の共有によって調べる力が身につかなくなることを考え、症例はランダムとすると考えた。

問題は評価法の樹立で、人によって何を参考に情報を調べたのかが異なるので採点者によって評価が異なってしまうと考えた。また採点者が学年全員を毎日採点するのは難しいことを考え、評価は可か不可で調べ方が正しいかどうかを判断してもらうことが現実的であると考えた。

第二部セッションII　　ⅢA班

科目名	1日1問ファッザニア
学習のねらい	実務実習を実りある物にするため、実臨床（病院・薬局）を例に情報収集、処方解析及び処方提案にいたるまでの考え方を身につける。
授業概要	医薬品情報の収集と症例への応用方法についての授業を行い、実務実習前後に症例問題を行う演習形式。
シナリオ 初回に、医薬品情報の収集と症例への応用方法についての授業を行う。実務実習前後に、1日1問（平日）ウェブ上で症例問題（重症例と軽症例、OTCや検査値を含む）をランダムに出題。 評価方法：5段階ではなく、認定。	

Ⅲ B 班

第二部セッションⅠにおいて、「６年間の薬学教育の中で身についたこと」について話し合ったことに対し、今回は「６年間の薬学教育の中ではできなかったこと」についてお互いの考えを共有した。そのうえで、必要とされるスキルを培うための理想の教育プログラムについて議論し、発表を行った。

【討論の経緯】
①「６年間の薬学教育の中ではできなかったこと」について意見を出し合った。

＜６年を通しもっとやりたかったこと・学びたかったこと＞
・在宅医療、フィジカルアセスメント
実務実習前に在宅医療で求められていることや、その要求に対応する知識や技能を身につけたかった。実習の際に在宅医療に関わったときに、実際に患者さんの血圧や脈拍の測定などを行っていた。フィジカルアセスメントの知識や技術を実習前から身につけておきたかった。

・OTC の選択/ドラッグストアの業務
近年セルフメディケーションが推奨され、一般用医薬品の普及が進んでいるが、学内の講義で一般用医薬品の特徴を学ぶ機会が少なかった。また調剤薬局の実務実習でも一般用医薬品を扱うことが少なく、一般用医薬品販売の応対を学ぶ機会も少なかった。

・抗がん剤のレジメンの講義
抗がん剤のレジメンの講義が実施されている大学と実施されていない大学がある。そのため学生間で知識に差があり、レジメンを学んだことのない学生は一から学ばなければならなかった。近年様々な抗悪性腫瘍薬が開発されているが、使用の際に重要な副作用の発現も多いため、悪性腫瘍に対する治療に関して実務実習前にしっかり学んでおきたかった。

・実習前の調剤の手技練習
OSCE 前に調剤の手技練習の時間がもう少しほしかった。ただし実際の現場は調剤の機械化が進んでおり、実習先に応じて新たな手技修得が必要であった。

・救急医療（手術室）、災害医療での薬剤師業務
救急においては一刻も早い処置が要求される。そのような状況において薬剤師は医師の指示の前に必要な薬剤を予測し、前もって準備することが求められる。「薬剤師は救急医療で何ができるの？救急医療について何を学んできたの？」と言われたことがある。救急で扱う薬剤の使用に関して学ぶ機会があると、救急医療の現場で薬剤の管理を率先して行うことができるようになり、薬剤の適正使用に加え医師や看護師の負担軽減につながる。

・薬剤師が関わる業務、チーム医療全般の参加型実習
薬剤師が関わっている業務を実務実習前にあらかじめ知っておきたかった。他職種と連携する中で医療従事者の一員として薬剤師が求められていることを体感できる学習があるとよいと感じた。

・英語でのコミュニケーション（薬剤師として使う英語）

2020 年には東京オリンピックが開催されることから、訪日外国人の数も増えることが予測されるため、英語をはじめとする外国語を用いたコミュニケーションが要求される。外国人にも有効かつ安全に薬を使用してもらうには外国語で服薬指導できるように語学を身につけておきたい。

・専門用語の勉強、カルテの見方

病院の実務実習において、入院患者さんの処方監査や服薬指導を行う際、専門用語が多くてカルテから必要な情報を収集するのに時間がかかってしまった。実務実習前にカルテはどのようなものかを実際に見る機会がほしい。

・実習先の選択（行政、病院、企業、薬局、DS）

現在の実務実習は病院、薬局のみである。行政や企業に関する情報収集などは能動的に企業説明会やインターンシップに参加するしかなかったので、行政や企業も実習先として選択できるようにしてほしい。また、実習先によって学べることが異なるため、複数の病院や薬局で実習したいという意見もあった。

・同種・同効薬の選択ができるように

同種同効薬の特徴を踏まえたうえで、それぞれの患者さんに最適な薬剤を選択する能力を身につけたかった。

＜意見評価＞

６年の薬学教育を通し、実習を経験した際に学ぶべき課題が見つかったとの意見が多く、実習前に学んでおきたかったことが多く挙げられた。

その中でもみんなが共通して学び足りなかったと実感していたことはそれぞれの患者さんに合った薬の選択の方法である。個々の患者さんに適した薬剤を選択する能力を培うための教育プログラムについて具体的な案を考えることにした。

②教育プログラムの具体案を考え、プロダクトを作成した。

実務実習事前学習の一環として一人の患者さんを入院から経過的にみる体験ができるプログラムがあるとよいと考えた。授業の最初に資料を配布し、個々の患者さんに対しての最適な処方をはじめに個人で考える時間を設ける。その後 SGD を行い発表、教員からの評価・フィードバックを受ける。初回の処方だけでなく、その後患者さんの経過を追って、さらに薬学的検討を加え、処方提案を行っていくことで、それぞれの患者さんに応じた薬剤を提案する課題解決能力を身につけることができると考えた。

【プロダクト】

科目名	個別化医療を目指して～あなたならどうする～
学習のねらい	実習前の事前知識として、患者個人に対して最適なレジメンや同種・同効薬の選択ができるようにする。課題解決評価能力や自信の育成を目指す。
授業概要	患者背景を考慮して、患者データから最適な薬を選択する演習・ディスカッション形式
シナリオ 実務実習前実習の一つとして行う。 授業の最初に資料を配布し、個々の患者の最適な処方提案を個人で考える時間を設ける。その後ディスカッションを行い発表、教員からの評価・フィードバックを受ける。その後、患者の容態を見て処方変更を行う。 将来的には模擬シミュレーションソフトの使用を検討する。	

Ⅲ C 班

第二部セッションⅡでは、「6 年間の薬学教育の中ではできなかったこと」をテーマとして、主にⅢC 班では、充実させたい薬学教育領域について議論を行った。以下に議論の経過とプロダクトを記した。

【議論の経過】

導入

・実践的な英語の学習→留学生と日本人を混ぜた SGD(Small Group Discussion)
・医療経済的な学習
・(薬剤師国家試験の)禁忌肢について学ぶ→禁忌の理由を結果から学ぶ
・薬学教育について学習する→カリキュラムについて考えることで学習の意図を把握
・フィジカルアセスメント→治療、副作用の評価をできるようにする
・実践的な統計学→論文の読み取り能力の養成

以上の意見が抽出された。これらを、6 年間の薬学教育のどの時期に、どういった内容で学習することが効果的なのかを議論した。結果、さらなる教育の必要性を挙げられたのが「実践的な統計学」についてであった。

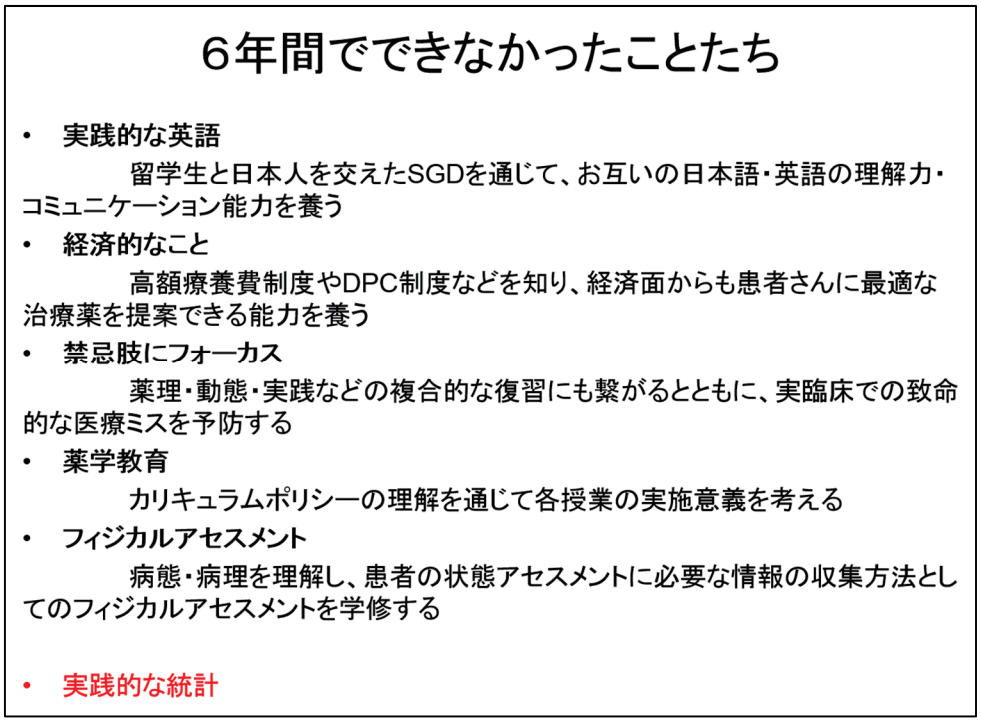
シナリオについて

スペース的な事情があり、プロダクトには掲載できなかったが、実践的な統計学の学習段階として、①統計用語等の基礎の学習→②実際の論文を用いた基礎のアウトプット→③論文の検索能力の養成→④検索論文の批判的吟味(SGD、全体討論)→⑤臨床統計家によるフィードバック、といった流れを考案した。

熟慮した点

「学習のねらい」の言葉の表現

【プロダクト】



第二部セッションII　　IIIC班

科目名	明日に役立つ臨床統計
学習のねらい	人命を預かる一員として、情報の適切な収集・処理能力が求められる。本講義では、特に統計解析の手法に着目し、その原理の理解を深める。また、実例を用いて、適切な検定法を判断し、実践する能力を養う。
授業概要	学部3回生以上が履修条件。統計の基礎を復習した後、実際の論文を用いて各検定法の原理やそれを用いるべき条件などを理解する（SGD形式での能動的学習）。その際、論文検索の方法を修得する。途中、臨床統計家による講義を介し、適切な検定法の実践が薬害の予防やひいては人々の健康増進につながることを学ぶ。
シナリオ 今回のSGDのテーマは「機能性表示食品」。「機能性表示食品」というキーワードから検索した論文をひとつ取り上げ、その有効性を裏付けているデータの妥当性（正しい検定方法であるか、結果の解釈が正しいか、など）を批判的に評価する。各グループの発表を行った後、全体討論に移る。	